とある白井黒子の兄

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある白井黒子の兄

【Ｎコード】
Ｎ３９３５Ｚ

【作者名】
葛根

【あらすじ】
白井黒子の兄。
そいつが引き起こす話。
微エロ、ＴＳなど注意が必要。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

プロローグ（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

プロローグ

●

白井黒子には兄がいる。
白井紅太（しらいこうた）だ。
両親の頭を疑う。
兄、白井紅太は両親の名前の付け方に思う所があった。
白赤、白黒。苗字の頭と、名前の頭を合わせるとあら不思議。
ギャグか？
赤黒兄妹である。
白も含めると三色だ。
それがどうした。
俺の妹がこんなに可愛いわけがないの時期を通り過ぎ呼び方がお兄ちゃんからお兄様に変わってしまった。
小5までは一緒に風呂に入ってくれたのに。
常盤台中学に入ったのが間違いであったか。
奴はお嬢様ではない。
俺の妹だ。
超ラブリーである。
貧乳だけど。
レベル4になった時はちゃんとメールと電話くれた。
嬉しかったが追いつかれてしまった。
兄的に先んじていたモノが減るのは威厳が減るのと同意である。
まあ、まだ喧嘩では負けない気でいるし、実際兄妹喧嘩しても勝利した。
喧嘩といっても試合のようなもので、殺し合いではない。
こっちはボクシンググローブ付きで手加減してる。
何しろ妹を傷つけるなど兄のすることではない。

とはいえ、風紀委員（ジャッジメント）になんぞ入ってしまったので、可愛い妹に傷が付かないように鍛えるという意味でよく喧嘩する。
喧嘩のあとは風呂だ。
レディーファーストで譲って覗くといつも、

『お兄様。死ね、ですの』

レベル４の空間移動（テレポート）で飛ばされる。
もしくは、石鹸かなんかが飛んでくる。
高校に入学した俺に対して扱い酷くね？
中学一年の妹に欲情しないわけないじゃない。
それでも俺の住んでいる第７学区の男子学生寮に来てくれるからその気がないわけでもあるまい。
家族だから宿泊許可いらないし。
逆に常盤台中学の寮は家族でも許可などでないらしい。
まあ、宿泊はできなくても部屋に入る位は出来るらしい。
執拗に部屋の入室を断る妹で、調べて解ったことだ。
侵入しようと思えば出来る。
だが、目を付けられると厄介だ。
それに、風紀委員（ジャッジメント）の兄が不法侵入などしたら妹に迷惑が掛かる。
常盤台中学学生寮２０８号室に住んでいる所まで掴んだのだが、諦めた。
能力を使えば侵入は簡単だがそれはそれでバレた時の反動が大きくなるだけである。

●

高校入学で上条当麻に出会った。
俺はコイツを知っている。
そりゃそうさ。

なんたって”視て”きたからな。
フラグメーカーで不幸体質。
説教殴りやろうで大体あってる。
幻想殺し（イマジンブレイカー）の持ち主
右手一本で全てを解決。お困りの方はツンツン頭の高校生にお声をおかけください。
きっと何とかしてくれます。
そげぶで。
何故この高校に入ったかは常盤台中学が近いからである。
レベル４はこの学校の最高レベルらしい。
小萌先生が言ってたから間違いない。
それにしても小萌先生をリアルで見るとアレだ。
保護欲が湧くというか、心の奥底から湧き出る何かがある。
持ち上げたこともある。
涙目で怒られた。
青髪ピアスはかなり羨ましそうに悶えていた。
アレは人間として手遅れの部類に入る。
あらゆる女性を迎え入れる包容力の能力者だ。
たぶん。

『ボクぁレッド君でもレッドちゃんでも受け入れるんよ？』

レッドは俺のあだ名である。紅太の紅の部分を英語にしたあだ名で
高校入学して一週間で定着してしまった。
あの言葉を聞いた時はマジで殴った。ギャグ補正で死ななかったの
が悔やまれる。
俺は正真正銘男だ。
顔立ちは妹の黒子に似てるが。
アイツの前では二度と女体化しないと誓った。

レベル４。
身体操作（ボディコントローラー）の紹介は自己紹介の際に説明したが、実演したら青髪に告られたのだ。
初対面同士なのに。
いやー、あの時のクラスの引き具合は思い出してもゾッとする。
俺に対してではなく青髪に対して引いた。
しかし、俺の能力でいじられる事がなく、むしろ保護されるようになったのはある意味青髪の功績である。
痩躯気味であるが、こう見えても握力とか測定器を壊せるんだぜ。
体力測定で世界新記録とか言うレベルじゃない異次元の結果を出してしまった。
冗談みたいな数値で体育教師が困っていたが仕方のない事だ。
だって、能力使用ＯＫというか使えって強制されたからやった。今は反省している。

『身体操作（ボディコントローラー）って便利だにゃー。女湯に入れるにゃー』

土御門元春はシスコン軍曹だ。とにかくシスコン。

『レッドにも妹が？！　それは義か？　実か？』

マジな顔でマジな口調だった。質問の内容はアホだった。

●

上条当麻の一級フラグ建築士には制裁を。

『ねぇ、当麻ぁ。私、可愛い？』
『えーと、紅太は男！　男なんだよ男なんです三段活用！　頼むから女体化で俺を惑わさないでー！　色々反応しちゃう！　だって俺、

男の子だもん！』

身体操作（ボディコントローラー）で巨乳、黒髪ロン毛の美女へ変化して、声帯をいじって声を色っぽく調整。そして、話しかければまんまと乗ってきた上条当麻。

葛藤していたが、視線は谷間に行っていた。

それ以来、女体化して上条当麻に対して性的ないたずらをするのが楽しくてしょうが無い。

セクシャルハラスメントである。

ん？

フラグなんて立ってねーよ。

いじり甲斐のある相手であるだけだ。

●

主人公

白井紅太

レベル：大能力者（レベル４）

能力：「身体操作（ボディコントローラー）」

肉体が変化する時、上条当麻は反応する――！！

●

プロローグ（後書き）

なんか始まった。レールガンの方メインです。

第一章　白井兄妹（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第一章　白井兄妹

●

白井黒子は焦っていた。
それは風紀委員（ジャッジメント）としての活動ではなく、家族である兄に対してである。
自身の中学入学、兄の高校入学から3ヶ月近く顔を合わせていない。
コレまでの人生で兄と顔を合わせていない期間としては最長期間である。
風紀委員（ジャッジメント）で忙しいと言って合わなかった。
実際は違うのだ。
姉と慕う人物で忙しい。
しかし、兄には紹介もしていないし、これからも紹介するべきではない。
兄は私の事をかなり好いていると思う。
それは女性としてなのか、妹としてなのかは不明だが、兄が可愛い女の子好きなのは確実である。
それに、自分自身が崇拝していると言っても過言でもない相手がおり、それを兄が見逃すわけもないのだ。
最悪、私とお姉様のどちらが好き？　と聞いてやろうか。

●

強者に目がないお姉様が私の兄に突っかかるに違いない。
レベル4とレベル5。
差はある。
しかし、自分の失態だ。

『黒子は兄妹とかいるの？　私、一人っ子でさー』
『一人、不肖の兄がいますわ』

それに対して、

『へぇー、お兄ちゃんかー。いいなぁ。で？』
『で？』

実力は、

『不肖のと申しましたが、性格的な問題ですの。強さでいったら、私なんぞ足元にも及びませんわね』

ついつい、口を滑らせてしまった。

『黒子、風紀委員（ジャッジメント）なのに？　お兄さんって風紀委員（ジャッジメント）なの？』
『いえ、ただの高校生ですの。でも、そうですね。体術、護身術などの多くの事を教えて下さいました。もちろん、私に傷がつかないように手加減ありでしたけど。それでも私の全力をぶつけても歯が立たない憎たらしい相手ですわ』

誇らしいと思わないが、兄の事では舌が回る。

『レベルで追いついたのにお兄様には勝てませんですの。まあ、こちらの手札を知っているという面もありますけど、まだ一度も勝った事がありませんわね』
『ふーん。お兄さん強いんだぁー。いいなぁ。そういうの』

憧れ、ですか。
でも、目の上のたんこぶ。というか、幾ら努力して、血反吐を吐く

ような訓練をしても勝てない相手というのは腹ただしいものですのよ？
そういった話をお姉様にしたのが失態だった。
写真を見せろだの。一度合わせてだの。
ぶっちゃけ戦ってみたいとかやめて欲しい。
白井黒子の思いとは裏腹に出会って欲しくない両名の邂逅は無常にも必須であった。

●

暴漢達に囲まれていた少女。
その制服は常盤台中学の物である。
通りゆく人々は横目に、それでも良識のある人物は風紀委員（ジャッジメント）に連絡した。
だが、風紀委員（ジャッジメント）が到着する間もなく少女は救われる。
少女を囲んでいた暴漢達は現れた邪魔者に文句を垂れながら人気のない裏路地に移動したのだ。
少女はその面影に一瞬目を奪われた。
自分の知っている人に似ている。
次の瞬間には自分を囲んでいた暴漢達が倒れていた。
似ている人物を思い出そうと気を逸した一瞬の出来事である。

「は？」
「風紀委員（ジャッジメント）ですの！　ってお姉様！　そいつから離れて下さいですの！」

御坂美琴の視線の先。
倒れる暴漢達の中心にいる人物とその先の奥にいる白井黒子の顔を見比べて理解した。
似ている兄妹だ。

間違うことのない顔の作りをしている。家族だなぁ。
それにしても黒子ったら兄をそいつ呼ばわりとは。

「……。通報にあった路地裏に連れていかれた女性というのは誤報でしたのね」
「黒ちゃん！　超久しぶり！　元気してたよね？！　む？　身長は数センチ伸びたね！」

黒子。お兄さんに黒ちゃんって呼ばれているんだ。

「お、お姉様、これは……って。のわぁあ」

消えた。お兄さんの方が。
いや、移動だ。
黒子に抱きついていたのだ。
後ろから抱きかかえるようにスキンシップしていた。
空間移動（テレポーター）能力者？　兄妹揃って同じ能力？
その認識を変えるものがある。
彼が居た足元。
コンクリートの地面に靴跡が刻まれていたのだ。
パラリと路地裏を作っている壁から破片が落ちた。
視線を合わせるとソコにも靴跡があった。
つまりは、壁を使った高速の立体移動だ。
靴跡を追うと彼の居た足場、壁の側面、黒子の真後ろの壁に刻まれていて、それが移動の経路であると予測できた。

「あぁ、黒ちゃん、黒ちゃん。可愛いねよー。よしよし」
「ち、ちょっと！　お兄様！　いい加減に、しろ！」

あ、切れた。

兄の姿が消えて、地面に叩きつけられる。
はずであったが、リバウンドだ。
ボールが地面に跳ねるようにお兄さんは跳ねた。
その上で、

「なんと破廉恥な下着！」
「こぉんのぉおお！」

妹のパンツを叱咤する兄がいた。それを叱咤する妹もいた。
なんか新鮮な黒子の反応を見ているなぁ。

●

「いつも妹がお世話になっています。御坂美琴さん」
「いえ、そんな事は……」

ファミレスだ。
黒子の仕事の処理が終わり、手近なファミレスで紹介された。
白井黒子の兄、白井紅太。
レベル４の身体操作（ボディコントローラー）である。
肉体強化から容姿まで変えられるという能力であり、その力の片鱗は先程見た。
高校１年生で、レベル１から努力でレベル４にまでレベルアップしたらしい。
自身と同じであり、親近感が湧く。
さっきみた光景が嘘のような礼儀正しい好青年。
それが御坂美琴が感じた印象である。
席は白井兄妹が正面におりその正面に私がいる。
顔を並べると本当に似ている。
高校の制服を来ていなければ姉妹と間違えそうだと思うのは失礼だ

ろうか。

「ところで、あの時どうやったんですか？」

それは私を囲んだ暴漢達の始末の仕方。

「ん？　ああ、あれね。顎先をちょっとね。こう、当てて、脳震盪」

黒子の顎の先を兄である紅太さんの拳の先がゆっくりと少し掠める。

あの一瞬で、5人を相手にそれをしたと言う。

「お兄様の最高スピードは肉眼では認識不可能なレベルですの。録画されたテープをコマ送りにしても腕が消えて見える程のスピード。相変わらず、でたらめですの。それが、身体操作（ボディコントローラー）の一端というのですから反則ですわ」

「へぇ」

感心。

黒子が男を褒めるなど初めて見た。

認めているのだろう。兄の事を。

いいなぁ。私も兄妹欲しかったなぁ。

「あ、きたきた」

それはパフェであり、ケーキであり、とにかく甘いものであった。

三人前はある。

それが全て紅太さんの注文したものであった。

「全く、お兄様の甘いもの好きも相変わらずですの」

「いやさー。能力的にカロリー消費がね」

それは、

「羨ましい。身体操作（ボディコントローラー）って考えてみたら女の敵ね。太らないし、思い通りの体型になれるし、顔も思い通りって何よ！　その羨ましい能力！」

素の自分が出てしまう、女性の羨む能力であった。

●

羨むものは嫉妬。
欲するものは理想。
配点：（女の敵）

●

第一章　白井兄妹（後書き）

マンガとアニメを都合のいい様に話の軸に。

第二章　身体操作の兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第二章　身体操作の兄

●

レベル測定。
常盤台中学はお嬢様学校である。
在学条件の一つにレベル３以上である事が含まれているとんでもない学校だ。
白井黒子は自分のレベルが変わらずレベル４であることに少なからず落胆した。
精度は上がっている。記録も伸びている。
それでも到底敵わない兄。
そぐわない。兄がレベル４であることだ。
風紀委員（ジャッジメント）に入り幾つかの事件を解決した。
相手の実力や能力の解析は出来る。
ならばこそ、兄の実力がおかしい。
同じレベル４でも相性や実力があり個々で変化する。
本当の実力を隠している可能性。
ないとは言い切れない。兄の手札は多い。
まだまだ隠している手札があるのは分かっている。
己が知る兄の能力は、その身体が消える程の高速移動術と容姿を変える変態性、それに軟体生物並の柔軟性。
腕。３０メートルは伸ばせるのを見たことがある。
容姿を変える。最後に見たのは小５。
一緒にお風呂に入るのが恥ずかしくなり、それを言ったら身体が女の子になっていた。
それでも中身を知っているのでその後の一緒にお風呂は断るようになった。
高速移動の数値は秒速８３．３メートルらしい。時速３００キロで

ある。新幹線かとツッコんだ覚えがある。
高速移動は当時の数値で、今はどうなっているかわからない。

●

初春飾利と佐天涙子がいる。
約束があった。
レベル５に会う。
常盤台中学のエース、御坂美琴に会える。
白井黒子の紹介だった。
だが、道中に遭遇した。

「あれ？　紅太さん？」
「お、初春か、久しぶりだな。元気そうだな。そっちの娘は初めましてだね。白井紅太だ。よろしく」

白井黒子の兄である白井紅太と初春飾利は知り合いである。
風紀委員（ジャッジメント）に入る前に知り合い、友人となった白井黒子。
その白井黒子に似ている兄が現れたのはいつだったか忘れてしまった。
何故なら気付けば白井黒子のそばに居たからだ。
レベル４。しかし、白井黒子が敵わないという。
学園都市のデータベース上でもレベル４。
一般人だ。だが、初春飾利は彼に風紀委員（ジャッジメント）に入って欲しかった。
それは今も変わりはない。

「あ、初春のクラスメイトの佐天涙子です」
「はい、よろしく。佐天さん」

別に呼び捨てでいいですよー、と佐天涙子が言っているのを見る。

思い出す。私の時も初めはさん付けだったなぁ。

「所で、君。本当に初春と同い年？」

それは私と佐天さんを見比べて紅太さんが問うた。

あー、そうですよーだ。色々と佐天さんは発育がいいですからね。

「えっと、そうです。初春とはどういった関係ですか？　白井ってもしかして……」

「そう、初春の友人の兄。白井黒子の兄だ。これから黒ちゃんの所に行くけど、そっちもそう？」

「そうですよ。もしかしてついに紅太さんも風紀委員（ジャッジメント）入りを決意されたんですね」

兄妹揃えば心強い。

だが、

「まーた初春は言ってるな」

「兄妹揃ってレベル４なんですから、兄妹揃って風紀委員（ジャッジメント）でもおかしくないですよ！」

断られるのは分かっている。

「へー、お兄さんレベル４なんですかー。すごいなぁ。私なんてレベル０ですよ」

●

佐天涙子は好感を持った。

レベルが高い能力者は総じてレベルの低い相手を小馬鹿にする節が

ある。
だが、眼の前の相手はそうではなかった。
「そうか。頑張ってレベルアップしようね。俺は初めレベル1だったから努力次第では上、目指せるよ」
道中、講義を受ける事になった。
「自分だけの現実（パーソナルリアリティ）という基板がある。その上で自己を確立する事が大事だよ。それはね、自分を信じる力。初めからレベル0だからと言って諦めずに究極な自己中で、自分こそ最高、最強って暗示でもいい」
「それが、レベルアップの秘訣ですか……」
紅太さんの場合は、そうなるらしい。
だが、結果としてレベル4だ。
学校で教わるよりも現実的でわかりやすいと思う。
「いきなり50キロ走れって言われても無理だよね。ならまずは500メートルから走りだして、次は1キロ、その次は10キロって感じで段階的に訓練すれば……」
地道な訓練と鍛錬。
それがレベルアップに必要な事である。
湧き上がる感情。それは、尊敬だ。
親しみのある人だ。
その妹さんに興味が湧く。
だが、見た。
ファミレスで女の子同士が重なりあっている所を。
その二人が、白井黒子と御坂美琴であった。

御坂美琴さんも白井紅太さんも同じく良い人である。
価値観の変わる日だ。
お嬢様と思っていた相手はゲーセン行こうと言だし。
尊敬できる人の妹はアレだった。

●

人集り。クレープ屋は流行っていた。
最後のゲコ太ストラップを貰ったのは白井紅太であった。
女の子相手におごるというのは男の使命らしい。
振り向けば膝から崩れて犬のような格好で落ち込んでいる御坂美琴がいた。
いい形の尻だ。

「ストラップ、いる？」
「え？」

子供らしい趣味を持っていた。わかっていたがまるでゲコ太中毒だな。

「ありがとうございます」

三人のお礼と、

「ま、お兄様ですから、妹に貢ぐのは当たり前ですの」

一人の感謝であった。
それぞれのクレープは口を付けられていた。

「黒ちゃんのちょっと一口頂戴」
了解を得ずに食べる。
「ちょっとお兄様。つまみ食いですわよ」
慣れた反応。その代わりに俺のも一口食われた。
「初春のはどんな味かな～」
「え？　あ、ちょっと」
初々しい反応。その代わりに俺のを差し出す。
「い、頂きます！」
一口食べられた。
「涙子のは～、どんな味かなぁ」
「あ、どうぞー」
微妙な反応。それでも、顔が赤かった。
その代わりに俺のを差し出す。
「あ、こっちも美味しいですね」
一口食べられた。
「美琴のはーっと」
「あ、ちょ、ちょっと待ったー！」

過敏な反応。だが、食う。

「はい」

差し出す。

「う、うううぅ」

唸りながらも食べた。顔が真っ赤である。

可愛い。黒子も同じ様に差し出したり美琴のを食べようとしていたが、防がれていた。

全員呼び捨てで良いらしい。そりゃ、年上だからな。

そろそろか。

●

異変に気付いたのは初春飾利だ。

それは昼の銀行のシャッターが閉じているというだけの異変である。

「アレ？　あそこの銀行、昼間から何で防犯シャッター閉まってるんだろう？」

それを聞いた全員の視線が集まった瞬間。

轟音。

爆破音が響いた。

素早く反応したのは風紀委員（ジャッジメント）の白井黒子と初春飾利であった。

「初春！　警備員（アンチスキル）への連絡と怪我人の有無を確認。急いでくださいな」

「は、はい！」

「黒子！」

御坂美琴が叫ぶが、

「お姉様と、お兄様は待機！　学園都市の治安維持は私達、風紀委員（ジャッジメント）のお仕事！　御行儀よくお待ちくださいな」

俺まで釘を刺された。

「黒ちゃん。行っておいで。危なくなったら――」

「それには及びませんわ」

●

三人の視線の向こう。白井黒子と銀行強盗がいる。

初春飾利は一般人の対処をしている。

取り残されて、待機を下された二人と無力な一人。

「腕を上げたなぁ」

一人の銀行強盗は宙返りをして投げられ背中から地面に強打された。

「すごい」

「さすが、黒子ね」

佐天涙子と御坂美琴の感想である。

発火能力者（パイロキネシスト）か。あの程度なら楽勝だ。

心配事はあったが、杞憂だったか。

「男の子が一人足りないんです！」

それは初春飾利の相手の叫び声である。
忘れ物を取りにバスへ向かった少年がいない。

「初春飾利はココを頼む。涙子と美琴と俺でその子を探すぞ」
「はい」
「わかったわ、手分けして探しましょう」

美琴は一人。涙子は俺とペアで探す。
手短に、三人で分散して探したほうがよかったが、涙子は身を守る術がない。
という理由でペアになったのだ。
変化はあった。
それは犯人の一人が人質を取れずに一人で俺達に向かって車で轢き殺そうとしてきた事だ。
人質になるはずの少年はいち早く俺と涙子が確保した。
その隙に犯人の一人は車に向い、何を思ったかこちらに猛スピードで向かってきたのだ。
殺意のある車に涙子が動けず、また、守るように抱きしめた少年も動けなかった。
目の端で御坂美琴がレールガンを撃つ構えを見せたが、その射線上に俺達がいた事で撃てずにいた。
ならば、俺が前にでる。

「こ、紅太さん！」

誰かの悲鳴に近い叫び声があった。
激突する。誰もがそう思った。
だが、直前に、男の右手が振り上がり、

「身体操作（ボディコントローラー）、私の最強のお兄様ですの」

轟音。

そして、振り下ろされた右腕は車のフロント部分を大破させた。

スピードの勢いで車体の後ろ側が持ち上がり、男の頭上を超えて回転する。

車体の背の部分から地面に落ち停止する。

その先に立つ男は無傷であった。

「ま、こんなもんだ」

佐天涙子の顔には驚愕の表情があり、それは取り巻きの見物人達も同じであった。

「す、すごい……」

●

子供を守った佐天涙子はお礼をもらっていた。

気恥ずかしいものだ。

それでも、嬉しいと思う。

レベル５の御坂美琴にも格好よかったと言われたし、白井紅太にもお礼と賛辞を貰った。

『身を呈して誰かを守るって事はなかなかできないことだよ。その事は能力の有無じゃなくて、人間として強いって思うよ。俺は』

正直、かなり嬉しかった。

御坂さんは見せ場を取られたと悔しがっていたが、それでもその目は獲物を見つけたような目だった。

黒子さんは怒っていた。
その相手は兄であって、そのやり取りは羨ましいものであった。

●

憧れと尊敬
その先に生まれるモノは何か
配点：（恋心）

●

第二章　身体操作の兄（後書き）

ルビが上手くいかない。とあるの独特の用語は困るぜ

ルビの振り方を親切に教えてくださった方に感謝。

ルビを修正

第三章　主人公と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第三章　主人公と兄

●

「当麻く～ん」
「げ、レッドさんじゃないですか」

とある日の事。
上条当麻の部屋には白井紅太が遊びに来ていた。
それも、女の格好で女体化している容姿で、誰もが振り向くような美女だ。
白井紅太の普段の髪の色は茶色であるが、今日は黒髪のロングであった。
上条当麻の反応を精査した結果。黒髪ロングのお姉さん系巨乳が弱いとわかった。
ならば、弱点属性で遊ぼうではないか。
胸元は開き、谷間が見える服に、短めのスカート。その下にはちゃんと女物の下着を穿いており、どう見ても女である。
それこそ街を歩けば誰もが振り向くような容姿であり、その娘を隣に歩けば嫉妬されるのは必須であった。

「あの、視線が怖いのは私(わたくし)の勘違いでしょうか？」

部屋から飛び出して街で買い物をする。
上条当麻の左腕には柔らかい刺激と良い匂いのする塊が当たっていた。
周りの男。羨ましい。けしからん。死ね。
その視線の先の上条当麻の心境は複雑であった。

●

こいつは男、コイツは男。
男だー！
はは、羨ましいか！　そこの羨ましそうな目で見ている奴！
中身は性悪な男だぞ！　でもな、オパーイの感触とか、肉々しい体つきとか女の子そのものなんだぜ。
良い匂いするのは香水か。手が込んでいる。
いやいや、冷静になれ。上条当麻！
こいつは男なんだ。
ほら、女の子同士で仲がいいと手を繋いだり腕を組んで歩いたりするだろ。
今の状況はそれだ。
不幸の根源の右手。
女の子にモテたりしないし、あらゆる不幸が付いてまわるが、今の姿はどうだ？
客観的に見ればそれはカップルという言葉が当てはまるだろう。
青春してる。勝ち組だと高らかに誇れる。
そう、相手が本当に女の子だったらな。
いや、見た目は完璧な女の子だ。
だから、街を歩いている際の男からの嫉妬の視線が。
女の子達はなんであんな冴えない男にあんなキレイな女の子がという疑問の視線が振りかかるのだ。
かくいう今も、

「はい、あーん」

とクレープ屋で彼女が購入したクレープを差し出されており、その周りの人、特に男性からの視線は強くなる一方である。
客商売であるクレープ屋の兄ちゃんでも一瞬こいつに見とれたのを

見逃さなかった。

「あの、レッドさん？」

紅太はよく人の食べ物を欲しがる。
いるだろ？　それ一口ちょーだいって言う奴。それだ。
あーんの前に、俺のクレープを一口食べた。その後、これだ。
あーんである。
乗るか反るか。

「なぁに？　”いつもみたい”に、口移しじゃないと嫌？」

ざわっと、周囲がざわついた気がした。
気のせいだ。気のせいにしてください。
不幸だー！

●

精神的に消耗した。
憧れの女の子からのあーんがアレほどの破壊力と羞恥心と精神力を使うとは思いもしなかった。
クレープの先。谷間とか見えるし、その顔は美人である。
だが、男だ。もう男でも……。いや、ダメダメ。その一線を超えちゃあ駄目！
不幸にも、周りから見れば幸福にしか見えない状況だったと思う。
街に出て僅か2時間。あっという間に過ぎ去る。
それは楽しいからだ。
もちろん、恋人同士のデート的なものではなく、友人同士の交流という意味である。
不幸体質を理解している友人はそれを最小限にする。

つまり、金銭は彼が持ち、食事の持ち運びや、道端のトラップに気を配り事前に知らせてくれるのである。
端から見ると亭主関白の男に従う女の姿であるが、それはいつもの事である。
鳥の糞が飛んでくれば、引き寄せてくれて回避。
バナナの皮が地面に転がっていれば彼が拾ってゴミ箱へ。
先ほどのクレープも彼が購入して彼が持ち運び、あーんされた。
あの発言は嘘だ。いつもみたいにという発言だ。
周りの反応と俺の反応を楽しんでいただけである。
それが、性悪の証なのだ。
だが、その性悪を打ち消す行為が俺のサポートのような動きである。
正直、有り難い。
本当、女の子だったら是非お付き合いを申し込みたい。
いや、むしろその先、いやいや、結婚を前提に。いやいやいや、諦めろ。こいつは男だ。

そして本当の地獄はここからだった。
セブンスミスト店内の一箇所。
女性物の下着を扱うランジェリーショップである。
そこにそぐわない人物。
男である上条当麻がいた。
当然、男である上条当麻は居心地が悪い。
だが、更衣室の中。
時折カーテンを開けて見せてくる。

「おわー！　見えてるから！　丸見えですよ！　レッドさん！」

ブラと下着のみの格好を見た。それは艶かしく、思春期の男子高校生には刺激の強いものである。
それを気にすることもなく、

「やっぱ当麻はこっちのブラがいいかな？」
その場でブラを取り外し、双山の頂と突起物まで丸見えのままで付け替える。
「ぶふぁぁぁぁぁ、見ちゃいましたよ。目視しちゃいましたよ。刮目しちゃいましたよ！」
「何やってんのよ！　アンタは！」
それはそうだ。
女性物下着の店でココは更衣室前だ。その先のカーテンは開かれており、中にはブラとパンツのみの女性がいる。
客観的に考えるなら俺がカーテンを開けて覗いたとも取れる。
変質者である。それを咎めるビリビリ中学生は正しいと思う。
「ビリビリ中学生か、お前にはまだ早いだろ！　アレこそがお似合いという言葉にぴったりな人物ですよ」
指差す先は更衣室内である。
「こぉんの、ド変態がぁあ！」
●
「所で当麻くん。この女、誰？　浮気？」
さすがに御坂美琴も店内で暴れる事無く、上条当麻に対して腹部への打撃。
その後、バックドロップという荒業で事済んだ。

しかし、ランジェリーショップの横の通路で修羅場が生まれ始めていた。

「え？　いや、知り合いと言うか、付け狙われているというか」
「ストーカーねぇ。まだ中学生じゃない」
「なんですってぇ！」

店内に響く程の声をあげる御坂美琴だったが、ココが公衆の面前であることを思い出して大人しくなる。

「と、とにかく。今こそ因縁の決着を……」
「ダメよ」

遮る様に言い放つ。

（当麻、話を合わせろ）
（り、了解であります）

小声で御坂美琴に聞こえない程度に上条当麻と会話した。

「なんでよ！　アンタには関係ないでしょ！？」
「あるわよ？　私達、これから新しい下着を脱がす行為をしにホテルに行くんだから」

一瞬、御坂美琴が停止した。
だが、言葉の意味を知り、顔が真っ赤に染まる。

「な、なな何言ってるのよ」
「当然、ナニよ。ねぇ、当麻くん。これから大人のお楽しみするんだからね？」

「そ、そうだ。残念だったな。ビリビリ中学生」

何故か上条当麻も顔が紅いが、

「じゃ～ねぇ。さ、行きましょ」

上条当麻の腕を取ってその場を後にする。
その姿に御坂美琴は声を掛けられずいた。
他人の恋路を邪魔する程無粋でもなく、何よりこの後するであろう
あの二人の行為を想像してしまい、戦うどころではなかったのだ。

●

とある日の上条当麻遊び
配点：（幸）

●

第三章　主人公と兄（後書き）

誤爆。

ホントは明日の昼更新分でした。

第四章　超電磁砲と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第四章　超電磁砲と兄

●

御坂美琴と白井紅太は相対する。
人気のない川縁に佇む二人。
事の始まりは、御坂美琴のメールであった。

『会いたいから来て』

それに釣られたのが白井紅太であった。
御坂美琴の性格を知った上で、勘違いした。
告白か！
いや、決闘の申し込みでした。

「さて、告白かと思って来てみれば色気のない決闘の申し込みとはね」
「いやいや、紅太さん。あって間もないですから告白とかないですよ」

決闘はありなのかよと突っ込みたい。

「んで？　黒ちゃんには内緒で呼び出してまで何でよ？」
「ま、黒子も貴方の事疑ってた見たいだし、レベル４の割にはどうも強過ぎるって」
「それは黒ちゃんの勘違いだね」
黒子の手札を知り尽くしているからな。

「それでも、強いんでしょ？　私、強い人に興味あるのよねぇ」
ちょっとエロく聞こえた。
遅かれ早かれ戦う事になっていたんだろうな。
自制のないエロ女め。
「なら俺は弱いから、むしろ降伏ということで決着つけね？」
「はっ！　馬鹿いってんじゃないわよ」
バチッと帯電する音が聞こえる。
「ま、お嬢様には似つかわない言葉遣いだな。いいよ。遊んであげるからかかってきなさい」
「なぁんですってぇえ！」
バチバチッと帯電する。感情の読みやすい相手だ。
御坂美琴の前髪から角のように青白い火花が散る。
それは槍の雷で一直線で襲いかかってきた。
迸る青白い電撃の槍の先。
御坂美琴は確かに当たったと確信したのだ。

●

爆破音に砂塵。
地面が抉れて砂が舞う。
御坂美琴は驚愕するのだ。
背後に感じる。
「何をやったのよ？」
「聞くバカがいるのかよ。それに答えるバカもいるわけないだろ」

言われて戦闘中だったと思いだす。
振り向いて無傷の相手を確認した。
やっぱりとんでもないとこだわ。
学園都市で私と戦える相手なんてアイツ以外にいるとは思わなかった。
記憶を探る。以前見た高速移動だろう。
だが、光の速さで落ちる雷を目で見て避ける事が出来るのだろうか？
私の攻撃は落雷と同じスピードだ。

「考えながらも手を休めちゃあいけないよ？　美琴ちゃん」

それは黒子に対するように兄が妹に説くような口調であった。

「ナメんじゃないわよ！」

自身を中心に３６０度範囲に放電する。
今度は当たったのを目視で確認したのだ。
しかし、

「なんていうか、勿体無いな」
「！　どうして？！　確かに当たったはずよ！」

無傷であった。
そして右腕が振り上げれて、

「人間の限界を超えた一撃って見たことある？」

解答の前に私の足元に振り下ろされる。
轟音と震撃。

「え、あ、あ？　嘘？」

土だ。

尻餅をついて周りを確認して理解する。

それは、隕石が落ちた後にできるクレーターである。

直径5メートル。深さ1メートル弱。

刻まれた痕跡は私と彼を地面の下に移動させるものであった。

●

種明かしをしよう。そう前置きをされた。

私達はあの場所から逃げた。

彼の一撃で学園都市では珍しい予測されない地震が起きたせいだ。

決闘場所から離れたファミレス。そこで夕飯を食べながらのことである。

「絶縁体で防がれたわけね。身体操作（ボディコントローラー）ってそんな事もできるわけ？」

「黒ちゃんには内緒ね」

しかし、よく食べるなぁ。三人前は食事をとっている紅太を見て呆れる。

どうも、能力の代償か使うと腹が減るらしい。

う、羨ましい。どれだけ食べても太らない。むしろ能力を使用すればカロリーを消費するという。

「でも、まあ、最後の一撃はなによ？　アレ、手榴弾以上の破壊力じゃない？」

「さあ？　測ったことないからわかんね」

「はあ？」

測定テストがあるはずだ。
高速移動と容姿の変態。それに怪力。
大能力者のレベル４とは軍隊において戦術的価値を得られる力が必要である。
その事を彼の説明で理解はできる。

「つまりは、高速移動で戦況をかき回したり、変態で仲間に紛れ込んで暴れたり怪力で色々殴り倒したりという戦術的価値が認められたということだな」

事前に敵対する軍の司令の容姿がわかっていればそれに容姿を変えて味方に有利な戦況を作り出せる。
潜入と謀略が学園都市にレベル４として認められた価値だということだ。
だからこそ疑問に思うのは彼のレベルは正しいものではない。
だが、その答えは単純であった。

「全力で戦えるのって３０分が限度なんだよね。それを超えると栄養失調になって倒れる」

１人１秒で倒せるとして、１８００人以上の軍隊を組めば彼は倒れる。
確実性を増すのなら３０００人～５０００人で編成された軍隊を用意すればいい。
そうやって己自身を評価する。

「代償ね。私も使いすぎると電池切れで動けなくなるし」

納得出来無い事も多い。

されど、目の前の幸せそうな食事を取る光景は見ている私までも幸福にさせるのだ。

●

「あ？　お、お兄様とお姉様？」

それは偶然である。
ファミレスから常盤台中学の寮までの道のりで、白井黒子の先に見慣れた二人の姿があった。

「落ち着きなさい。白井黒子。あれは、きっと偶然道でお姉様に会ったお兄様が夜道を送るという名目で私に会いに寮付近まで来るというシスコン行為なはずですの」

それでも焦燥感が湧き上がる。
兄か、御坂美琴か。
二人が男女の仲になり、結婚したら正式なお姉様の義理妹になれるのだ。
だが、それを良しと思えない。
話が飛躍し過ぎていますわね。
たかだか二人が偶然帰り道が同じになっているだけである。
ならば、今は二人の仲を進展させるのではなく、邪魔をする。

「おー、黒ちゃんだ」

抱きついた先はお姉様だった。

「いきなり抱きつくんじゃないわよ」
「ぐぇっ」

首根っこを掴まれた。体重は重くない。だが、女の子一人を軽々と片手で持ち上げる兄。

「さっきソコで偶然美琴に会ってね、ついでに今日の見納めに黒ちゃんに会いに行く所だったんだ」

ホッと心の焦燥感が消える。
やはり予測は正しかった。
そして、抱擁された。

「んー、これだ」
「ち、ちょっとお、お兄様！」

それはいつもの行為である。
狭い腕の中、膝打を決めようとしたが、

「はは、じゃーねー」

私とお姉様の後ろ5メートル程の所におり、手を振っていた。

「嵐のような人ね。まあ、良い人じゃない。妹思いの」
「それをシスコンっていうのですよ。お姉様」

●

超電磁砲と身体操作。
果たしてどちらが強いのか
配点：（勝負）

第四章　超電磁砲と兄（後書き）

熟読せずにサッと読んで楽しむことをお勧めします

第五章　無能力少女と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第五章　無能力少女と兄

●

ファミレスだ。
学生対象にしているため商品の値段は安くてフリードリンクも豊富であり、料理も美味しいのだ。
初春飾利と佐天涙子の正面には白井紅太が座っていた。
それは白井紅太が割引券を持っていたので、それに便乗する形で二人は昼食を頂いたのだ。
偶然ではなく、二人の内一人。初春飾利が白井紅太の行動を監視カメラで追い、偶然を装ってばったり出会ってしまったという演出をした。
目的は勧誘である。
一方、佐天涙子は風紀委員（ジャッジメント）に遊びに来ていた。
友人の黒い部分を垣間見たのだが、彼に会えるならいいかという理由で初春飾利に付いていったのだ。

「結局、いつになったら風紀委員（ジャッジメント）に入ってくれるんですか？」
「やだよ」

佐天涙子は何度目かのやり取りにため息をつく。
意外に初春ってしつこいんだなぁ。

「ところで涙子達の学校生活はどう？　楽しい？」

あ、無視した。
初春とのやり取りの間も話しかけてくれるので、嬉しいのだが逃げ道に使われている気がする。

「え、ええ。まあ、まだまだレベル０ですけど。目標は目指せレベル１です」

アレ以来、地道に能力開発をしている。
その熱心さが教師に伝わったのか、褒められた。

『佐天さん。熱心でよろしい。心境の変化ですかね。いい？　あなた達の年齢は心と身体の成長期です。考え方が変われば一気に伸びる子もいますよ』

「それで良い。それと初春。風紀委員（ジャッジメント）には入らん。俺より美琴に声をかけてみればどうだ？」

初春の目が輝いていた。
あちゃー。御坂さん。頑張れ。

●

佐天涙子はつい先程の事を思い出す。
ファミレスを後にした際に初春飾利は風紀委員（ジャッジメント）からの呼び出しで不在になった。
本当はこのあと三人でセブンスミストでウィンドウショッピングをする予定であった。
それが二人きりのデートのようなモノになるとは思いもしなかったのだ。
紅太さんとは出会ってまだ間もないし、これも数度目の邂逅である。
二人きりとなると初めてのことである。
若干の緊張と期待と興奮が織り交ざる。

「さ、行こうかー」

衝撃が走る。
心の準備も無いまま手を握られた。

「え？　あ、はい」

その態度は慣れたものであり、容易に予測ができる。
妹の黒子さんとこんな感じなんだろうなぁと。
それでも、嬉しいと思う。それにドキドキする。

「あ、あのー、慣れてますね。こういうの……」

自分でも驚く。口が滑った。人生初の自分の意思とは関係なく口が動いたのだ。

「ん？　ああ、手か。黒ちゃんといつのも感じだった。嫌なら放すよ」

手から力が抜けるのがわかる。
それを放してしまうことは相手の心を放してしまいそうであり、焦燥感が奔る。
だから、思わず握る。自分から。

「い、いぇ。ちょっとびっくりしただけです。是非このままで、お願いします！」

●

驚くことに、洋服や下着に詳しかった。

それは女性物である。選ぶのは男性である。
複雑な感情を持ったのは佐天涙子であった。

まあ、黒子さんとの付き合いとかで詳しくなったと。
それでも、自分のバストサイズにぴったりのブラを出された時は驚いたと共に若干引いた。
ならば仕返しとばかりに女性物の洋服を私が選び渡して見るとなんの抵抗もなく、更衣室で着替えたのだ。

「うわー、かっわいいです」

顔立ちが黒子さんに似ているとは思っていたが、女の子の格好をすると黒子さんの姉に見える。
それより、なんで女装になんの抵抗がないんですか？！

「黒ちゃんに良く着せ替え遊びさせられたからね」

●

次々に店内を回る。
時間を忘れるというのはこのことだろう。
気付いたら午後6時間際であった。

「まじーな。こりゃ警備員（アンチスキル）に見つかるとうるさいぞ」
「もうそんな時間ですか？！　ちょっとやばいかも」

それはバスの時間が終了してしまう事を示していた。
プレゼントされた服が荷物だ。それに歩いて帰るには遠い。
なによりスキルアウトが動き始める時間でもある。

「ああ、心配するなよ。送って行くから」
「え？　いいの？」
たった一日で随分と仲良くなったと思う。
言葉から敬語が消えたのは相手が必要ないと言ったからだ。
「ま、少し我慢しなよ？」
「うわっ！」
お姫様抱っこというやつだ。
「きゃー！」
次の瞬間には景色が高速に移り変わった。
自分の体重を気にする間もなく、文句を言う暇もなくただ驚いた。
車とか抜いてるんですけどー！！
うぎゃー。と、飛んだ。
交差点の信号機の上を飛び越えて着地。
衝撃もなく、速度も落ちなかった。
絶叫系の乗り物は苦手ではない。だが、これは叫ばずにはいられない。
「非常識ですー！」
●
ぐったりと言う言葉が今の自分にどれだけ似合うだろうかと思う。
だが、自分の部屋が見える所までの移動時間はわずか数分であった。
「楽しかったよー」

「最後のがなければ満点だった。いやー、あれはもう無しで」
ハハッと乾いた笑いで答えが来た。
そして、
「うんうん、じゃあまたな」
頭を撫でられた。
はあ、私は妹かなんかですか？
今日は紅太さんの事をよく知る日だった。
人をからかうのが好きな人だ。
女装が似合う人だ。
優しい人だ。
私の憧れる人だ。
そして、心を動かされる人だ。
「うん、じゃ、またね。紅太さん」
私の顔は赤いだろうか。
それでも言う。
「今日は楽しかったです。よかったらまた二人きりで遊んで下さい」
「おっけー」
俺、帰るわ。と短い言葉を残し、夕焼け空の中に飛んでいった。

●

親交と進展
少女が想うのは何か

●　配点：（喜び）

第五章　無能力少女と兄（後書き）

本来、警備員（アンチスキル）なのにスキルアウトになっていたのを修正。

第六章　日常生活の兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第六章　日常生活の兄

●

バランスという物がある。
それは学校でも必要なものである。
上条当麻や土御門元春が所属するクラスははっきり言ってバカクラスである。
クラス総合のテスト評価然り、所属する人物たちも癖のある人物が多く所属するのだ。
その中に白井紅太もいる。
校長の策である。
苦肉の策であった。
優秀な人物を果たして最下層とも言えるクラスに入れて良いものかと。
だが、入試試験の成績トップを入れてやっとプラスマイナスゼロなのだ。
教育者として、底辺の成績を収める人物達を一つのクラスに集めてそのクラスだけ見放すということはできなかったのだ。
優秀な成績を持つ人物がおればそれに刺激されて、勉学に励む者もいるだろう。
また、学業で不明な点があれば、先生に聞くよりも同級生に聞いて理解を得たほうが刺激になる。それに、色々な相談もできるのだ。
学友同士で互いに高めあう事ができれば良いと想う。
そして、学業以外にも青春を楽しんで欲しい。

●

「小萌先生とはつまり、年上なのに年下で先生なのに幼女という矛盾を抱えた存在だ。身長１３５センチ、容姿は外見十二歳だが、実年齢は――」
「はーい、白井ちゃーん。ちょっと来てくださいですよーっ！」

笑顔に青筋を作り明らかに怒っている様子である。
月詠小萌。学園都市の七不思議に指定されている大人の女性だ。
大人の女性だと言うには容姿は１２歳程度であり、身長も低い。パッと見小学生高学年位にしか見えない。ヘタをすれば小学生低学年に見える。
どちらかと言うと、後者に見える人物が多いようである。
海外で大学を飛び級で卒業した教師という経歴はないのだ。
つまりは自分たち高１の年齢からプラス１０歳以上は離れているはずである。
学園都市某一位には不老不死実験の被検体と揶揄（やゆ）される事だけはある。
その幼い容姿で目に涙らしき物を溜めて上目づかいで睨まれるとどうしてもこちらが悪いことをしている気になってしまうのだ。

「小萌先生、ごめんなさい。すいませんでした。許してください。もう年の事は言いません。いや、むしろ貴方のその容姿は愛でるべきものであり、決してその容姿についての追求など今後いたしません。
だからお願いです。その泣きそうな顔をやめて、俺とその容姿に疑問を抱いた上条当麻をお許しください」
「あれれ？　上条さんもさりげなーく悪者になってませんか？　なってますよね？！　すいません。ごめんなさい。
そこ！　筆記用具を投げつけない！　繊細な上条さんが傷つくでしょ！？」

これが日常的な風景である。
フラグメーカーの上条当麻と自称優等生の白井紅太は成績の差は天と地の開きがあるが、友人としての付き合いは密接である。

「カミやん。地雷を自ら踏むなって言ったはずだにゃー」

●

愛玩奴隷上条当麻となったのは一体いつからだっただろう。
入学した頃の学生服が衣替えをした辺りだろうか。
夏服から見える下着だったり、生脚のその先に見える理想郷だったり、屈んだ時にクラスメイトの谷間に興奮してしまったり。
それら全ては黙っていれば分からないものを、土御門であったり、青髪が叫ぶものだから不幸なことに巻き込まれたのだ。
つけ込む隙があれば容赦なしに攻めてくるのが白井紅太であった。
上条当麻は男にも色目を使うド変態である。同性愛者だ、と。
体育の着替え。
偶然に視線が白井紅太に行く。
ああ、コイツはやっぱり男なのか。
改めて確認したのが間違えであった。
それは青髪が普通に、

「いける！　いけるでぇー！　俺、普通に興奮できる。なあ、カミやんもそう思うだろう」

同調を求めてきたのだ。
土御門以外にの男子が何故か胸と股間を押さえていた。
どこからかその事が女子に伝言されてそれ以降、上条当麻の格は底辺に落ちた。

●

とある日の放課後。
２つの陰が道路に伸びる。
夕暮れ時。
他愛もない光景だ。
それが兄妹の在り方である。
並んで歩く。歩幅はゆっくりとしたものである。
流れる風景。

「平和ですわね」
「そうだね」

それだけで通じる。
平和な時間。幸せな時間。
望むものがあるのだ。
女の子と呼べる年の少女はこれを守るために風紀委員（ジャッジメント）として使命を果たしている。
一方、男はそれを見守るだけである。
同系の髪色に、血の繋がりを示す顔。
手を繋いでいる。客観的に見て仲の良い兄妹に見える。
事実、嫌がる素振りのない妹とそれに満足する兄がいる。
兄離れ出来無い妹ではなく、妹離れ出来無い兄なのだ。
兄妹という関係は死ぬまで続くだろう。
いつかは兄が離れていく。
それは絶対だ。
その時に私はどう思うのだろう。
奪われたと思うのか、やっと妹離れしたかと喜ぶのか。
その時が来るまでわからない。
空間移動（テレポート）能力を使える程の頭で持ってしても人の心というものはわ

からないのだ。

「じゃ、また明日な」

「ええ、それでは」

手が離れて温もりが消える。

ただのいつもの別れだ。

また明日。

頼んでもいないのに一緒に帰る事になるだろう。

それで、お姉様が気を使って先にどこかへ行ってしまう。

あら？　結構おじゃま虫ですわね。

お兄様は放っておいても良いけど、お姉様は放っておけませんですわ。

●

いつもの日常。

いつもの兄妹。

配点：（兄弟愛）

●

第六章　日常生活の兄（後書き）

にじファンのランキングに入っています。これも読んでくださっている皆様のおかげです。
改めて感謝。

第七章　虚空爆破事件と兄　前編（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第七章　虚空爆破事件と兄　前編

●

夏。
自販機の前で二人の少女は話す。
「また例の事件？」
自販機で購入した缶ジュースを飲む。
変わったラベルだが、御坂美琴はこの缶ジュースが気に入っていた。
「これで五件目ですの。例によって爆発そのものは小規模で怪我人は無し、けれど――」
対して報告の様に語るのは白井黒子である。
「愉快犯にしてもあんまり笑えないわね。で？　犯人の目星は？」
「昨日、ようやく手掛かりが掴めましたの。お姉様、重力子（グラビトン）ってご存知ですか？」
記憶を探り思いだすように言う。
「重力子の事だっけ？」
「どのケースも爆発の直前に重力子の急激な加速が衛生によって観測されていましたの。アルミを起点に重力子の速度を爆発的に加速させ、一気に周囲に撒き散らす。つまりアルミを爆弾に変えていた、ということですわ」

御坂美琴はそれならデータバンクで調べて犯人はすぐ捕まるなぁと思った。
それを口にしたのだが、
「該当する能力者はずっと入院していてアリバイがありますの。一連の事件を起こすのは不可能ですわ」
どうやら苦労しているらしい。
ならば、その犯人を見つけようではないか。
そして、相手次第で腕試しでもしてやるか。
だが、心を読まれたかのように釘を刺された。
事件を解決するのも学園都市の治安維持活動と平和を守るのは風紀委員（ジャッジメント）の仕事だと。
そして、
「スカートの中に短パンを穿かない！」
「それは関係無いでしょうが！」
常盤台のエースとしての己を振り返れ、女らしくしろと言われた。
余計なお世話よ！

●

とあるコンビニで爆破事件が起こった。
それが、威力、範囲を拡大し、場所も時間も関連性が認められず手掛かりがない連続虚空爆破（グラビトン）事件の始まりであった。

●

爆破事件から一週間後。

風紀委員（ジャッジメント）の第一七七支部所属に訪れた男がいた。
支部に居たのは訪れた男の妹は風紀委員（ジャッジメント）に所属していた。

「場所も時間も関連性がなくて、遺留品を読心能力（サイコメトリー）で調べても何もでない。その上に風紀委員（ジャッジメント）の同僚が９人負傷している。手掛かりがなくて困った果てに兄に頼る妹が可愛くて仕方ありません」
「そういうのはいいですから、何かありませんの？」

白井黒子はこの事件の手掛かりのなさに忙殺されていた。
遺留品を調べても、現場を調べても何も手掛かりがない。
新しい発見もなく、知恵も出したがそれでも何の手掛かりも掴めない。
ならば、風紀委員（ジャッジメント）ではない人物に相談することで何か新しい考え方が発見できるかもしれないと思い兄を呼び出して相談して見たのだ。
疲れて思考がおかしくなっていたのかもしれないと後悔した。

「黒ちゃん。短期間で急激に力を付けた能力者の犯行かもって言ったね」

それは可能性の問題である。

「それ、合ってると思うよ」

何故かというと、

「場所、時間の関係性は無視して、能力の威力測定。段階的に強くなっているね。だから犯人は喜んでいるんだね。自分の能力に。そんで、一週間前の風紀委員（ジャッジメント）に被害があった事件から、被害者が風紀委員（ジャッジメント）になってるね。目的がどこかで移行したんじゃない？　いや、初めから狙いは風紀委員（ジャッジメント）だったのかも。少なからず、風紀委員（ジャッジメント）の仕

事に不満がある人物が引き起こしていると考えると繋がるね」
感心と驚き。そして、
「つまり、犯人の狙いは風紀委員（ジャッジメント）？！」
結論が出る。
見計らったとうタイミングでそれは来た。
衛生が重力子（グラビトン）の爆発的加速を観測したのだ。
その観測地点は――。

●

「へー、超電磁砲（レールガン）ってゲームセンターのコインをとばしているんですか」
「そうよ。まあ、５０メートルも飛んだら溶けちゃんだけどね」
セブンスミストで洋服を選びながらの会話である。
「必殺技があるとカッコイイですよね」
本来は四人のはずであったが、誘ったルームメイトは仕事だと言って断られた。
随分と珍しいと思ったが、それだけ事件に切羽詰っているのだろうと思う。
結局、初春さんと佐天さんと私だけセブンスミストで買い物することになった。
「私もインパクトのある能力だったらいいなぁ」

佐天さんの望みはわかる。
地道に能力開発訓練を始めていると聞いた。その時の顔は希望に満ちていた。
きっと良い能力者になると思う。

「初春、こんなのどうじゃ？」

初春さんに見せたのは紐パンであった。

「はい？！　無理無理。無理です。そんなの穿けるわけないじゃないですか！」
「これならスカートめくられても堂々と周りに見せつけられるよ」

初春さん苦労してるなぁ。

「御坂さんは何を探しに？」

唐突に話を振られた。

「あ、私はパジャマとかね」
「それならこっちの方に……」

先行して初春さんがパジャマのあるコーナーに向かう。
展示品のパジャマ。
これ、可愛いなぁ。

「アハハ、見てよ。これ。こんな子どもっぽいの小学生くらいまで来てたよねぇ」
「そうですねぇ。小学生くらいまではこういうの着てましたよ」

い、いいもん。どうせパジャマだし。他人に見せる訳じゃないモノじゃない。
だから、小学生が着ようと私が着ようと可愛いものなのだからいいじゃない。
二人は別の服を見ている。
今の隙に……。
合わせる！

「何やってんだ。オマエ？」

●

幼女の頼みは洋服店を探しているということで、紳士たる上条当麻は嫌な顔一つせずに案内した。
セブンスミストだ。
そこで、会いたくない人物が鏡に向かってコソコソと何かしていたので声をかけた。
変質者め。

「な、な、何でアンタがこんな所にいるんのよっ！」
「いちゃいけないのかよ」

公共の場であり、洋服店だぞ。俺だって服くらい買う権利はあるはずだ。

「おにーちゃーん」

幼女だ。お兄ちゃんと呼ばれるのは悪くない気分だ。
あー、癒される。

「アンタ、妹いたの？」
「いや、俺はこの子が洋服店探しているって言うから案内しただけだぞ」
クラスの外道どもに見つかったら通報物だ。
「今こそ因縁の決着を今ここで……」
駄目だこいつ。早く何とかしないと。
事あるごとに因縁を付けてきて暴力を振るってくる相手だ。
「オマエの頭ん中にはそれしかないのかよ。大体、こんな子供の前で始めるつもりかよ。それにココじゃまずいだろ。文句があるならすぐに視界から消えるよ。さー、行こうか」
「うん、お兄ちゃん！　じゃあねー。お姉ちゃん」
天使の加護を得た。ビリビリとの対決を回避したぞ。

●

能力の上達を確認。
望みは破壊と創造。
配点：（爆弾魔）

●

第八章　虚空爆破事件と兄　後編（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第八章　虚空爆破事件と兄　後編

●

街を疾走する中、白井黒子は同僚の安否と先に飛び出した兄を想う。
第一七七支部を出発する前に同僚である初春飾利に事件の続報を知らせた。
偶然、観測地点であるセブンスミストにいたのだ。
知らせたはいいが、重大な要件である事を伝える前に避難誘導を開始すると言って電話を切られた。

「今回のターゲットは初春だと言うのに！」

空間移動（テレポート）を使い全力で現場に向かう。

「お兄様も、黒ちゃんの友達に万が一があったら悲しむだろ～。とか言い残して飛び出すし。全く自分勝手すぎますわ！」

●

居合わせた御坂美琴に協力を仰ぎ、セブンスミスト店内の一般市民の避難は滞り無くすんだ。
店側の協力もあり、爆弾が配置されている事を悟られないように店内放送で電気系統のトラブルという名目で避難させた。
パニックは避けられた。あとは、肝心の爆弾を探しだすことだ。
とりあえず、避難終了を報告するために白井黒子に連絡をとる。

「全員避難終わりました」
「初春！　今すぐそこを離れなさい！」

悲鳴にも近い通話音に驚く。

「過去の事件全てで風紀委員(ジャッジメント)が負傷していますの！　犯人の真の狙いは、観測地点周辺にいる風紀委員(ジャッジメント)！　つまり今回のターゲットはあなたですのよ！　初春！」

「え？！」

●

セブンスミスト周辺の人集りに上条当麻はいた。

せっかく幼女と戯れていたのに店内放送で本日終了のお知らせが届いたのだ。

不幸だ。

「あれ？　あの子。どこだ？」

はぐれた。自分に付いてきているとばかり思っていたのだが、人ごみの中、はぐれてしまったようだ。

そして人集りの中から誰かのつぶやきが聞こえたのだ。

「もしかして、さっきの放送って方便で、最近起きてる連続爆破事件じゃね？　風紀委員(ジャッジメント)の娘もいたし、爆弾があるって知らせないのは店側のファインプレーだね」

同時に、自分の不幸体質から最悪の結論が導かれる。

彼女はまだ店内にいる。さらに、爆弾の存在が事実だとすれば最悪だ。

そして、目に入って来たのは避難誘導を手伝っていたビリビリだ。

「ビリビリ。さっきの子、見なかったか？」
「は？　一緒じゃなかったの？」
「外にいないんだ。もしかしてまだ店の中にいるのかも」
「なにやってんのよ！」

自分でもそう思う。しっかりと手を繋いで一緒に外に避難するべきだった。
横断歩道を挟んだ向こう側のセブンスミスト。
そちらに駆け出そうとしたその時、疾風と共に現れた人物がいた。

「到着～。ん？　不幸の塊がいるな。ちょうどいい。来い！」
「紅太？！　何だよいきなりっ？！」

普段の容姿では紅太と呼び、ソレ以外の容姿ではレッドと呼ぶ。
同一人物なのだが自分の中では別人として見ているため区別の仕方として呼び方を変えるという方法をとっているのだ。

「美琴も一緒か、不幸量産機の癖にピンポイントで役立つな」
「はぁ？　紅太さんとコイツが知り合い？　どういうこと？」

疑問を浮かべるビリビリだが、そんな場合ではない。
紅太の真剣な顔がそれを伝えている。

「美琴は事の詳細を知ってるな？　だったら外で犯人らしき人物を探せ。不幸は俺と来い」
「え？」

疑問の声がビリビリと重なる。
犯人という言葉からセブンスミストで爆弾事件が関わっていると理解できる。

そして、焦る。幼女が危ない。

「人助けに行くぞ」

その言葉で全て伝わる。

「おう！」

「ち、ちょっと？！　私も行くわよ！」

●

結局、御坂美琴は俺達に付いてきた。

話を聞かないやつだ。だが、助かったのは初春飾利と最後に別れたフロアの場所を覚えていた事だ。

二人を脇に抱えてエスカレーターを二足で登り切る。

そして、

「おねーちゃーん」

子供の女の子が呼ぶ相手、初春飾利が居た。

女の子の手の中にはカエルの人形。

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

「よかった無事だったみたいだ」

抱えていたのを開放していた人物が俺の横で安堵した。

初春飾利もこちらに気付き何か言いたげであった。

だが、初春飾利は人形を女の子から受け取り投げ捨てる。

「逃げて下さい。アレが爆弾です！」

投げ捨てた人形から女の子を守るように初春飾利は女の子を抱く。
それを守るように御坂美琴が立つ。
更にその先に俺と上条当麻が並ぶ。
直線上に並ぶ。
人形が異形を始める。

「防げ無能」
「はは、少しは遠慮ってもんを――」

上条当麻が俺より前に立ち構えて右手を差し出す。

●

轟音の後。
静けさが支配する空間で御坂美琴は目の前に居る両名を見る。
超電磁砲（レールガン）で爆発物ごと吹き飛ばそうとしてコインを取り出したのだが手から滑り落ちた。
間に合わないと思った。
その先にいた両名は普通であった。
先頭のツンツン頭からU字を描くように私達の居る場所は爆発の被害を逃れていた。

●

「スバラシイぞ！　僕の力だ！　徐々に強い力を使いこなせるようになってきた！　あと少し数をこなせば、無能な風紀委員（ジャッジメント）もバカにしてきたアイツらもみんなまとめて殺せる！」

人気のない路地裏。

不意に肩に触れる感触に驚き振り返る。

「ガッ！　ゲフッ！」

衝撃。

そして痛み。

顔面を殴られたのだ。

「俺はさぁ。お前がどんな被害を出そうとも知ったこっちゃないと思っていた。それこそオマエをバカにしてきた奴が死のうと関係のない話だからな」

「な、何を言っている？」

「でもなぁ。無能な風紀委員（ジャッジメント）だと？！　ふざけんなよテメェ」

身体が浮く。

首元の服を掴まれて持ち上げられたのだ。

「ひっ」

恐怖だ。アイツらとは次元の違う明確な殺意を感じる。

「残念な事にテメェの目論見は外れた。死傷者どころか誰一人カスリ傷一つ負わなかったぞ」

「バカなっ！　僕の最大出力だぞ？！」

いつもこうだ。

何をやっても上手くいかない。

力のある奴がムカつく。

僕をつかむ彼。

左手は僕を掴んでいる。もう一方の右手でビルの壁に手を当てて、

そのまま壁の一部を毟りとった。

「あぁ……」

「昔はできなかったけど、努力して頑張ってレベルを上げた。風紀委員（ジャッジメント）だって頑張ってるさ。それに、テメェみたいに楽してレベル上げしている奴に風紀委員（ジャッジメント）がどうこう言われたかねぇ！」

掌に収められた壁の一部が握撃で砕ける。

その光景を目に入れた。

そして、右手が僕の頭に添えられて、

「こ、殺さないで……」

懇願した。

「ま、もう一発くらいくらっとけ！」

拳骨だ。

それもあまり痛くない。

身体的なダメージはないのだが、何故か心にダメージが来た気がした。

●

「容疑者の少年が自首という形で確保されました」

「……。了解ですの」

先に到着しているはずの兄の姿はなく、負傷者無し。死傷者無し。

犯人は捕まる。

残る風紀委員（ジャッジメント）の仕事は事後処理だ。

初春達がいた場所だけ全くの無傷。
一体、能力をどう使ったらこういう風になりますの？
疑問をぶつけるべき相手の兄に向かって思った。
初春は背を向けていたため結果としてお姉様がどうにかしたと思っているのだが、私は別の可能性を捨て切れていない。
何かしたに違いないのは兄だ。たぶん。

●

結局私は何もしていない。
実際に初春さん達を救ったのはアイツらだ。
「いいの？　今名乗り出たらヒーローよ？」
爆破を防いだ人物と犯人を自首させた人物に声をかける。
「おい、不幸。なんかキレ気味に聞いてきてんぞ？」
「はあ。ビリビリ。みんな無事だったんだからそれで何の問題もねーじゃんか。誰が助けたなんてどうでもいい事だろ」
なーに、カッコつけてんのよ。
「あのなぁ。美琴。俺らはヒーローになりたいわけじゃない。ただ困っている人がいたから助けた。そこにお礼はあっても名誉はいらないんだよ」
「そーゆーこと」
お人好し。偽善者。
だんだん紅太さんの本性が見えてきた。
性悪……。

立ち去る二人を見送る形になった。

「スカしてんじゃないわよ！　私にカッコつけてんじゃないわよ！
ムカつく！」

●

正義の味方かお人好しか。
事件は終焉を向かえた。

配点：（主人公達）

●

感想でも書いたもの。
シスコン早見表。
主人公はレベル４。
レベル０　無能。感心がない。落ちこぼれシスコン。
レベル１　低能。会話が少ない。メールのやり取りをする程度のシスコン。
レベル２　異能。親しいが家族レベル。買い物の荷物もち程度のシスコン。
レベル３　強能。休日に一緒に遊びに出かけれるレベルのシスコン。エリートシスコン扱いされ始める。
レベル４　大能。一緒にお風呂に入れるレベルのシスコン。互いに尊敬の価値が得られるシスコン。
レベル５　超能。一線を超えちゃってるレベルのシスコン。シスコン軍曹とも呼ばれ肉体関係をほのめかす重度のシスコン。

第九章　後日談と先輩と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第九章　後日談と先輩と兄

●

高校生としてエロ本は必須である。
また、エロに関した映像も。
そして、寮暮らしとはいえ、隠すのは男の性である。
シンプルな隠し場所はベッドの下。
少しひねって本棚に紛れ込ませる。
上級者はあえて隠さないなど。
そんな思春期の高校生男子上条当麻は令状のない家宅捜索に踏み切られていた。
クラスメイトで友人である人物。
白井紅太だ。
彼、というか今は彼女という呼び名が相応しい容姿である。
どこから仕入れてきたのか自分の学び舎の女子の制服であった。

「当麻くんはベッドの下か。年上系を学ぶ傾向があるね」
「やーめーろーよー。人の性癖をその容姿で口にしちゃだめです！」

ティーン雑誌のモデル並の容姿である。黒髪ロングに大きめのバスト。谷間を見せるように制服のボタンが外れており、スカートも短めで目のやり場に困る。
そんな彼女が自分のエロ本を持ってこれは何だと説明されるのはおかしな性癖の持ち主でなければ恥ずかしい思いをするだけである。

「ほら！」
「わー！　スカート思い切り捲り上げましたよこの人！」

発言とは裏腹にばっちり見ていた。
全く持って何しにきたのだと問いたい。

「さて、言葉では否定してるけど身体が正直な当麻くん」
「なんだよ」

本題に入る気だと感じる。

「この前の爆弾事件の犯人は自首したと言ったがその後、事情聴取で風紀委員（ジャッジメント）になりたいと言ったそうだ。何でもバカにしてきた風紀委員（ジャッジメント）の事をよく知って出来るならば、自分と同じ境遇の人を助けたいと言ったそうだ」
「……」

それは良いことを聞いたと思う。
曲がった性根がいい方向に向かったと思う。

「初めからそういった思考になれば良かったんだけどね。ま、あのヒョロイ身体でどこまで訓練に耐えれるか分からないけど」
「台無し！　ちょっと良い感じだったのに！」

●

「犯人にも思う所があったんでしょうね」
「それにしても、まさか風紀委員（ジャッジメント）になりたいなんて言うとは思いませんでした」

白井黒子と初春飾利は事情聴取の報告を見て驚いた。
多くは無いが、事件を起こした犯人が逆の立場。つまり、風紀委員（ジャッジメント）

になるという事例はある。
右の頬を腫らして、頭に小さなコブができていた犯人が自首するまでの間になにかあったのだと容易に推測できた。
お兄様かお姉様のどちらかが何かをしたと思う。
結局、事件が収束したのだが、お兄様はその日見つからなかった。
後日、事件に付いて聞いてみたが、

「気のいいヒーローが現れたんだよ。たぶん」

謎の証言を残していた。
答える気がないものに対して兄は絶対に答えない事を知っているので追求することはなかった。
事件後、風紀委員（ジャッジメント）で人事が行われた。
負傷者の補充と今後凶悪犯に対しても抵抗できるように人事配置がされたのだ。
白井黒子の先輩に当たる固法美偉が第一七七支部に来ることになったのだ。
研修などで世話になった人物である。
レベル3であり、透視能力（クレアボイアンス）を持つ彼女は年上で風紀委員（ジャッジメント）の経験も豊富だ。
力強い味方であるが、巨乳だ。

●

「へー。お兄さんがねぇ」

固法美偉は事件の裏にあった経緯を後輩の白井黒子に聞いていた。
虚空爆破事件の真相を見抜いた人物。
面識はないのだが、何回か白井黒子から兄の話を聞いたことがあった。

「その人、風紀委員（ジャッジメント）に興味とかないの？」
優秀な人物であるのなら引き込みたいと思う。
だが、
「まあ、初春が何回か誘っているようですが、その気はないようですの」
残念。
人それぞれだものね。
しかし、その洞察力には興味が湧く。
「貴方のお兄さんってどんな人？」
その質問に白井黒子は困ったような表情で答える。
「掴みづらい人物ですわね。昔から妙に落ち着いていましたし、頭も良かったですわね。その割に性悪な部分もありますし。初春が言うには理想の兄と言っていましたわ」
それでも、と前置きをして続ける。
「一緒にお風呂に入ろうとか、休日に一緒に出かけようとか、下着が薄いからどうにかしなさいとか。口うるさい所もありますわね。客観的に見れば理想の兄かもしれませんが、兄妹としてはあまりシスコンなのもどうかと思いますわね」
「へ、へぇ。だいぶ変わった人ね。過保護と言うか、ある意味妹想いね」

愛情があり過ぎるのもどうかと思う。

「まあ、一人の男性と見るのなら私でも一目おける人だと思いますわね。家族感情を抜きにして、お兄様は気が利くし優しいし、何より、強くて格好いいと思えますわ」

憧れだろうか。
家族を良く言うのは恥ずかしい面もあるはずだが、ハッキリと断言する辺り認めている部分もあるのだろう。

「お兄さんのこと好きなのねぇ」

それは兄妹として。
だから固法美偉は白井黒子の微妙な表情をしている事に気づかない振りをした。

●

後日談と人事。
先輩と後輩。
家族愛と愛情。
配点：（先輩）

●

２０万ＰＶ突破とこれまでの感謝（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

２０万ＰＶ突破とこれまでの感謝

白井兄妹の日常

●

「これで見納めかぁ」

感慨深い口調であるがそれを聞いている人物は不機嫌であった。

「お兄様。本当に、これで最後ですからね！」

白井黒子。当時彼女がまだ小学５年の時の話である。
よりにもよって両親は不在。
宿泊してくると連絡が入った。
兄曰く、妹か弟ができるかもねー。らしい。
それは嬉しい事だ。
その時の私はそれが正しく理解出来ない年齢だった為素直に喜んだのだ。
そして、夕食前の事である。
白井家では夕食前にお風呂に入るという習慣がある。
私が小学３年までは兄と一緒にお風呂に入るのに抵抗がなかった。
だが小学４年になると恥ずかしくなってきた。
周りの女子も両親と一緒にお風呂に入るのを止め始めており、まして、異性の父親や兄弟と入るのは殆どいなくなっていた。
私の両親達は、

『あらあら、仲がいいのねー』

と言うだけであった。
さすがに小学5年になって兄にこれで最後と告げたのだ。
これが認められなければもう口を聞かないと言ったのが効いたらしい。
中学生にもなって小学生高学年の妹と一緒にお風呂に入っているのは問題があると思う。
そろそろ兄の下半身を見るのが恥ずかしい。
顔とは裏腹なものが付いていた。
小象からスペースシャトルに変化する頃にはまともに見れなくなっていた。
私も胸が膨らみ始め女の子から女へと身体が変わりつつあったのだ。
だからこそ、一緒にお風呂に入るという行為はもうお終いだ。
むしろ遅すぎたほうだ。

『ならコレだったら恥ずかしく無いよね？』

女体化するのを初めて見た。
そこで確信する。
この兄は変だ。
そういう問題ではない。
とにかく、もう一緒にお風呂に入る事だ嫌だったのだ。

『なるほど。もうお年ごろなのか』

もう、ではなく。既にお年頃だ。

●

赤飯だ。
夕飯に赤飯が出た。

兄の手作りであった。

「もう生理は終わってますけど？」

「お風呂卒業の記念」

それは私の記念ではないはずだ。

「全く、いつになったら妹離れしてくれますの？」

絶望した顔。

だが、私としては正論を言ったつもりだ。

まあ、裸の付き合い以外なら認めてもいい。

「今夜は一緒に寝ようねー」

「イヤですわ」

落胆という言葉がコレほど似合う人物は初めて見た。

「お兄様は中学生なのですからそろそろ彼女の一人くらい作って下さい」

「黒ちゃん以上に好みの子がいたらその時は考慮しよう」

駄目だ。この兄。早く何とかしないと。

「高校生までにはシスコン卒業してくださいね？」

それから数年後。

高校生になった兄と中学生になった私の関係は今まで通りである。

互いに寮暮らしになった。

しかし、仲の良さは変わらなかった。

互いの人生で数カ月間も顔を合わせることがなかった期間があったにも関わらず、出会った時はいつも通り。
これが家族というものなのだろう。

●

「中学生になったからってこんな下着、お兄ちゃんは認めません！」
「そう言われても既に穿いてますわ。それに能力使用に関わってくるので履き心地優先ですわ」

ランジェリーショップに兄妹で訪れるという事に何の抵抗もないのは私が変わっているからだろうか？
久しぶりの兄妹揃っての買い物に少なからず気分が良くなっていたのかもしれない。
それにしても、女性の扱いに慣れてますわね。
兄との買い物で気付いた事だ。
さり気なく荷物を持ったり、道路の車道側を歩いたり、細かな所に気を使っていた。

「お兄様、こういった所は彼女と来るのがいいのでは？」
「ん？　彼女なんていないぞ。まあ、高校で友人は何人かできたな。そいつらはバカだけど面白い奴らだよ」

何気に彼女が居るのか聞いたがいなかった。
そもそも、彼女ができたらまっ先に知らせに来るだろうな。この兄は。
それより、友人が出来たという事はいいことだと思う。
互いの学生生活の話をするのは初めてだ。

「常盤台ってお嬢様学校じゃなかったっけ？」

「まあ、学内ではそこらへんの女子中学生と変わりませんわね。世間知らずのお嬢様も何人かいますけど」
学生生活の話から風紀委員（ジャッジメント）の話。それから能力の話。
色々話したかった。
しかし、時間が足りなかった。
別れの時間である。
家族であると同時に学園都市の生徒である以上、下校時刻がある。
「おっと、今日はこれまで。また今度にしようね」
あっさりと別れを告げられた。
「え、えぇ。また今度ですわね」
その、また今度が次の日であるとは思いもしていなかった。

●

とある日のとある家族のやりとり。
配点：（家族）

●

サブタイトル通り。
気付いたら２０万ＰＶ突破していました。
初めて見て思ったのは黒子の人気。
驚いたのがランキング入ったこと。

感想は嬉しいものだ。
あと、鋭い人に気付かれた。
主人公の能力は幽白の戸愚呂兄弟を足したものです。

女体化→戸愚呂兄
筋力操作→戸愚呂弟

って感じです。
アイツらは妖怪だからな！
強さまで同じじゃないよ！

強さに関しては結構チートっぽいですがあくまで対人レベルで強いだけです。
銃で撃たれれば普通に傷つきます。
毒ガスを撒かれれば死にます。
物量で攻められれば栄養切れで倒れます。

そんな感じで今後もこのＳＳをよろしく。

あと、作者からの問。

やっぱ、レベルアッパー事件までやったほうがいい？
一応書いてますがここいらで終わってもいい気がした。
あと次作候補

・恋姫†無双
（オリ主、どっかの武将で、恋姫†無双の住人。文武両道でドＭ）
・ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ
（オリ主、アサシンのマスター。アサシンはハサン。マスターはとあるＳＳと同系で身体強化系に特化した魔術師）

・とある魔術の禁書目録へ介入
（そのまんま。上条当麻君と事件解決とフラグ建設）
・リリカルなのはシリーズ
（オリ主、ストライカーズからスタート。なのは一筋のはずが他の娘に逆レイプされるほど好かれる。レアスキル魔力供給持ち。それ以外は並レベル）
・ゼロの使い魔
（オリ主、貴族からスタート。ゲルマニア所属でキュルケと顔見知り程度。土のトライアングルレベル。二つ名「武器庫」）

など考え中。
全部エロ含むよw
是非コレで！　という方は感想か活動報告のコメントに書きこんで下さい。
作者的にはゼロ魔かなぁ。以前ゼロ魔ＳＳで挫折したからリベンジしたい。

２０万ＰＶ突破とこれまでの感謝（後書き）

誤字修正

能力使用関わって

能力使用に関わって

閑話０１　次作の話とか（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

閑話０１　次作の話とか

アンケート実施

●

前回の次作候補の話
少し詳細を記載

・恋姫†無双
概要
オリ主、どっかの武将で、恋姫†無双の住人。文武両道でドＭ。
関羽程度の武に桂花程度の文は持っています。
登場人物を知らない人用。武力９０知力８０って感じです。
二槍の槍使い。趙雲子龍の兄。泣きホクロが印象的な槍使い。
一応、血の繋がりの無い義兄妹です。
（Ｆａｔｅｚｅｒｏのランサーじゃね？って言うな！）

・ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ
概要
オリ主、アサシンのマスター。アサシンはハサン。マスターはとあるＳＳと同系で身体強化系に特化した魔術師。
ハサンはｆａｔｅゼロのアサシンですが、ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの方でハサンを召喚って感じです。
身体性能は全盛期の言峰と同じ位でチートです。
ダーク系です。結構人が死んでいきます。切嗣並の非情さを持ち合わせています。
卑怯、卑劣は褒め言葉というキャラ。

・とある魔術の禁書目録へ介入
概要
そのまんま。上条当麻君と事件解決とフラグ建設。
上条当麻の記憶がなくなるところまでやる予定。
基本的に原作の流れで話は進みます。
上条当麻のサポートキャラ的な位置づけ。
フラグキャラ。
インデックス、神崎、委員長、御坂美琴、黒子の予定です。
友人フラグ
ステイルマグヌス、土御門

・リリカルなのはシリーズ
概要
オリ主、ストライカーズからスタート。
なのは一筋のはずが他の娘に逆レイプされるほど好かれる。
レアスキル魔力供給持ち。それ以外は並レベル
保有魔力量はランクSSだが、出力が下手。
その為、総合ランクがAランク程度。
攻撃力は並。
ユーノ・スクライアの友人で管理局員。
なのは達とは訓練で同期になって顔見知り。同い年でその頃から仲がいい。

・ゼロの使い魔
概要
オリ主、貴族からスタート。
ゲルマニア所属でキュルケと顔見知り程度。土のトライアングルレベル。二つ名「武器庫」
成り上がり貴族。平民と仲がいい。
土系統のトライアングルで戦争用の兵器、武器を作って売る武器商

人という顔を持っている。
戦略、戦術は高レベルであり、自身も武器の扱いに長けてる。
貴族らしくない人柄。相手が杖を持つのなら機関銃を持って対抗する卑劣な人物である。
遠距離からの狙撃方法を確立している立派なメイジ殺し。
トリステインの学校に行ったのはちょっと殺しが過ぎてほとぼりが冷めるまでの冷却期間とゲルマニア皇帝の勅命の諜報活動のため。

やはりとある禁書への介入が多い。

次になのはかゼロ魔が同等くらい。

その次に恋姫とＦａｔｅ。

禁書への介入の意見が多いです。

なので、次回、禁書への介入を書いたものを投稿。
反応を見てダメそうだったらＩＦストーリーとして禁書を開始。
本筋であるとある科学の超電磁砲のレベルアッパーまで書いて終了という流れ。
イケそうだったらそのまま禁書に突入。
とある科学の超電磁砲の方はここで終了という流れになります。

クリスマス明けの月曜日までアンケート取ります。
紹介した次作はどれがいいですか？

１：恋姫†無双
２：ｆａｔｅ　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ
３：とある魔術の禁書目録へ介入

４：リリカルなのはシリーズ
５：ゼロの使い魔

番号でもいいので感想、報告のコメント欄に書きこんで下さい。

閑話０１　次作の話とか（後書き）

恋姫の概要に追加。
兄だが義兄妹。

第十章　終わりの始まり兄と友人（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十章　終わりの始まり兄と友人

●

夏休み。
それに伴う停電。
とある不幸な高校生は出会いがあり、その物語の開演が待ち構えていた。
科学とは異なる魔術の世界に足を踏み入れる事になる。
科学と魔術が交差し、不幸な主人公の物語は始まるのだ。

●

もう一人の主人公である白井紅太の元に妹から連絡が入った。
虚空爆破事件の犯人の少年が意識不明になり病院に搬送されたという知らせであった。
容態は謎の意識不明が続いている状態で、身体のどこにも異常がない。
ただ、意識だけが失われている状態で原因不明で手の打ちようが無いという物だ。
それがある日を境に同じ病状の患者が次々と現れていると医者は言った。
幻想御手（レベルアッパー）事件絡みだという予測に情報不足で判断がつかないと白井黒子は思った。
そして、病院で大脳生理学の専門チームの一人。
木山春生と出会う事になる。
「全員そろった所で改めて自己紹介しておこう」

木山春生の周囲。
白井黒子と御坂美琴と白井紅太がおり、その三人に向かって木山春生が発言する。

「私は木山春生。大脳生理学を研究している。専攻はＡＩＭ拡散力場。能力者が無自覚に周囲に放出している力の事だ」

木山春生は制服を見て判断する。
常盤台の制服だ。ならば、説明は省いても問題ないだろう。
常盤台の制服に風紀委員（ジャッジメント）の腕章をしている少女の血縁関係が顔から推測できる男にも特に説明はいらないだろうと思う。
分からなければ後で聞けばいい。

「私は風紀委員（ジャッジメント）の白井黒子です」
「白井黒子の兄です。白井紅太だ」
「御坂美琴です」

やはり血縁関係だったか。似た顔をした兄妹だな。
ん？
ミサカ……。
ああ、レベル５の。

「君が御坂美琴か」
「知ってるのか？」

白井兄が言葉を挟む。
なるほど、この中で主権を握るのは彼か。

「ああ、レベル５ともなると有名人だからね」

もう一つ、思い出した。
身体操作（ボディコントローラー）の白井紅太。
肉体変化（メタモルフォーゼ）は学園都市の中に僅か3人しか存在しない。
その肉体変化（メタモルフォーゼ）よりさらに稀少な能力者だ。
容姿の変化から人間の体内にある物質まで操作出来ると聞く。
詳しくは知らないのだが、能力のデータは研究者の一部では有名だったはずだ。

「そして、君。白井紅太。学園都市に一人しかいない稀少（レア）な能力者……」
「はぁ！？」

御坂美琴は知らなかったようだ。
余計な事を口走ったか。
まあまあとなだめている白井兄となだめられている御坂美琴を放っておいていいだろう。

「あの……、それで何かわかったでしょうか？」

医院長が私に向かって問いかけてきた。

「今の所は何とも言えません。データを持ち帰って研究所で精査するつもりです」

データなら送る事も出来ただの、ご足労かけただのどうでも良い建前だ。
医院長とのやり取りが済んだ所で白井妹が尋ねてきた。
「幻想御手（レベルアッパー）についてお尋ねしたいことがあるのですが」

「幻想御手（レベルアッパー）？」

それはネット上で広まっている能力をレベルアップさせる道具だという。

「それはどういったシステムなんだ？」

「それはまだわかりませんの」

「形状は？　どうやって使う？」

「わかりませんの」

まだ存在すら確認されていないのか。

ならば答えは、

「それでは何とも言えないな」

しかし暑いな。脱ごう。

「ふぅ……、暑い」

「おぉ。ナイス……。っ痛っ！　黒ちゃん、蹴るなよ。美琴も殴るなよなぁ」

「何をマジマジと見ているのですかお兄様！　何をイキナリストリップしてますのっ！　貴女は！」

「いや、だって暑いだろう？」

暑いなら脱ぐだろう。

それがこの暑さを回避するための行為であり、別段見られても気にすることはないはずだ。

「アンタは向こう向きなさい！」

「美琴、君にも希望はあるよ」

●

病院近くのファミレス。
冷房が効いており涼しい。
白井紅太は熟考する。
大人の女性のバストはスバラシイものだと。
妹もいいがたまには違うタイプの女性もいいと思う。
なるほど、無い物ねだりだ。
周りに美少女が多いが美女の大人の女性は初めてだと思う。
木山春生。
都市伝説の脱ぎ女だ。
黒の下着がなかなか似合う人物だ。

「つまり、ネット上での噂。幻想御手（レベルアッパー）なる物があり、君達はそれが昏睡した学生達に関係しているのではないか。そう考えているわけだ」

理論的であり、クールビューティーという言葉が似合いそうだ。
これは、上条当麻の好みだろうなあ。
恐らく、道を聞かれたり探しものがあると、この人が困っていれば確実に手伝うはずだ。

●

木山春生との話合いは乱入してきた初春飾利と佐天涙子を含めてつつがなく終了した。
途中、佐天涙子のこぼしたジュースがストッキングにかかってその場で脱ぐというハプニングがあったものの、幻想御手（レベルアッパー）が見つかり次第、木山春生に調査の協力を取り付けれたのだ。

そして、その帰り道。
主人公の運命は交差する。

「あ、紅太と、ビリビリかぁ」
「ビリビリ言うな！　あとねぇ、あからさまに私の方を見て残念そうな顔をするな！」

親しい友と、毎度イチャモンを付けて勝負を仕掛けてくる女。
どちらが嬉しいかと問われれば前者である。

「こんな所でどうした？　不幸。確か補習だったはずだろ？」
「ああ、その帰りだ。ちょっと英国式の教会を探しててさぁ。知らない？」
「何？　アンタ十字教徒だったの？」

ビリビリは放って置いていいのだろうか？

「いや、忘れ物を届けに行かないとなんねーかもだからさ」
「また、不幸に巻き込まれようとしてるのか？　まあいい。ソコなら俺が知ってるから連れていってやろう」

重畳という言葉はこういった時に使うのだろう。

「サンキュー。じゃあ、行こうぜ」

紅太に付いて行く様に足を向ける。

「って、コルァ！　私を無視してんじゃないわよぉ。アンタ達！」

電撃が走り周囲の電化製品が不具合を発した。

「おい、不幸。オマエのせいじゃね？」
「いやいや、このビリビリのせいですよ？！　どう考えても！」
壊れた電化製品の弁償という末路が見える。
ならば、
「取り敢えず、逃げろぉぉおお」
走った。遁走だ。
一体１２０万円する警備ロボの故障など見ていない！

●

不幸絶好調だな。
見るに見かねて付いてきたが、やはりコイツは不幸だ。
聞くと昨日も御坂美琴に絡まれたらしい。
その決着を今つけようと御坂美琴に言い寄られていた。
だが、上条当麻の脅しに御坂美琴はビビった。
マジメにやってもいいのかよと、脅す顔と低めの声で脅したのだ。
「不幸だ。朝は自称魔術師。夕方はビリビリときたもんだ」
夏休み初日から不幸だな。
朝に魔術師ってか。
「まっ、まじゅつしって……、何？」
美琴……。心が折れたな。

●

交わることのなかったはずの運命は神の意志で交差する。

配点：（介入）

●

第十章　終わりの始まり兄と友人（後書き）

脱字
嬉しか
嬉しいか
に修正

第十一章　兄と魔術の話（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十一章　兄と魔術の話

●

自称魔術師を名乗る自称シスターが自称魔術結社に追われていて、自称を証明するために服を触ったら全裸で、噛み付かれた。
自称１０万３０００冊の魔導書を持つと言うシスターには悪いが訳がわからん。
そして、自称シスターの修道服『歩く教会』の一部であるフードを上条当麻の部屋に忘れたもんだから取り敢えず自称シスターの所属するという英国式の教会に届ける事になるかもしれないからその場所を知っておきたかった。
さらに聞けば、その自称シスター曰く

『君の右手の話が本物ならね、その右手があるだけで『幸運』ってチカラもどんどん消していってるんだと思うよ』

それだけは正しいと認めよう。
教会を案内した後、腹減ったと抜かした当人の上条当麻は所持金３２０円だった。
悲しくなったから牛丼大盛りを奢ることにした。
何故奢るかと言えば、幾つも自称の着いた話が面白かったからだ。

「自称シスターの言う魔導書ってのは恐らく、チップに記憶されたものか、メモリー機能を持った電子機器に入っていたと考えられる。もしくは、記憶だ」
「おいおい、紅太さん。俺の話を信じるんですか？　話しておいてなんだけど嘘くさい話ですよ？」
「ん？　嘘だったのか？」

●

それは、信頼だ。
俺の話す眉唾な話をまるっきり信じている。
俺自身嘘っぱちだと思う話なのに、紅太は俺の話を全て事実だと信じているのだ。

「紅太は良い人ですねー」

若干恥ずかしくなった。

「はいはい。それよりも、自称シスター。そのインデックスと言う子の服が上条当麻の右手に反応したことが大問題だ」
「何で？」

頭の悪い俺には何が問題なのか分からない。

「悪魔の証明だよ。上条は魔術ってやつをその右手で証明した。あらゆる異能の力を打ち消す幻想殺し《イマジンブレイカー》に反応したって事は魔術がソコに存在していたって事だ。まあ、自称シスターと上条の話が全て真実ならという前提だが」

悪魔の証明。悪魔が存在すると証明したいなら悪魔を連れてこいよってやつだ。
なら、魔術を証明しろと言った俺にインデックスは修道服、『歩く教会』を証明品として差し出した。
それを見事に幻想殺し《イマジンブレイカー》でぶち壊してしまったわけだ。
悪魔を証明した瞬間に悪魔を打ち消したってね。

不幸だ。

「さらに大問題は続くんだけど」

「えー、何ですか？　上条さんの脳はそろそろ限界ですよ」

だが、紅太の真剣な顔を見て冗談が通じない雰囲気を察した。

「インデックスは追われていると言ったな。その追っている敵は『歩く教会』の魔力を発信機としていると。そして、『歩く教会』は絶対の防御力を持っていて、それが壊されている。敵に取っては好都合だな。今度はシュレーディンガーの猫だな。『歩く教会』が壊れているか壊れていないか、それを確認するために、見つけたら取り敢えず攻撃するだろうね」

それはつまり、インデックスは見つかり次第傷つけられるという事実であった。

その事実を叩きつけられたのだ。

しかも、こんな牛丼屋で。

「どうして――」

どうしてそんなに他人行儀でいられる！　冷静でいられるんだ！

叫びたかった。

怒りをぶつけたかった。

でも、紅太にそれをぶつけても意味はない。

それに、俺自身インデックスの話を聞いて、信じなかったのだ。

インデックスと別れて補習を優先したのは誰だ。

『歩く教会』を壊したのは誰だ。

部屋に忘れていったフードを返さなかったのは何でだ。

後になって悔やむ。

後悔だ。
こんなに想うのなら引き止めておけばよかった。
友人をもっと頼ればよかった。
過去に戻れるなら、インデックスの事を紅太に任せて補習を受ければよかった。
補習なんぞ受けずに一緒についていけばよかった。
どうすればいいか、紅太に聞けばよかった。
だが全ては過去である。
ならば、これからの事を考えよう。

「インデックスを探し出さないと！」

まずはそれだ。

●

忘れ物であるフード。
それがインデックスとの残された繋がりである。
上条当麻の幻想殺し（イマジンブレイカー）が触れておらず、『歩く教会』が持つ魔力を辿ってインデックスを追う魔術師が必ずそのフードのもとに現れるだろう。
その予測を立てたのは紅太である。
そして、言う。

「もし自称魔術師が現れても上条当麻の右手がある。それに俺もいる。だから、ノコノコと現れた魔術師を締め上げてインデックスの居場所を吐かすなり、人質にするなりで、何らかの役に立つはずだ」

紅太に米俵を抱えられる様に運ばれている。
そりゃ、こいつが走ったほうが速いさ。

だけど、格好がつかない。
有難いと思う。
インデックスを探しだすと言った俺に何も言わず協力してくれている。
助けてくれるつもりなのか、それともインデックスの話の真相を確かめるためか分らない。
そう言えば、紅太の能力って女体化と怪力以外知らない。

「ところで紅太って強いのか？　レベル４だから弱いはずないと思うけど、魔術師相手ってどうなの？」
「そりゃ、お前の幻想殺（イマジンブレイカー）しがあるだろ。俺の強さは、まあ、そこそこだ」

●

交差した運命に足を踏み入れる。
踏み入れる世界はどんな世界なのか。
配点：（魔術）

●

アンケート協力ありがとうございます。
月曜深夜１２時まで受付します。
今のところなのは優勢。
次にとある介入です。
恋姫とＦａｔｅが同じくらいで並んでます。
ゼロ魔はこのままドベ独走か？？
今の順位を反映すると、
なのは＞＝とある介入＞恋姫＞Ｆａｔｅ＞ゼロ魔

って感じです。

妄言

とある介入となのは同時進行でさらに東方もやっても週一更新なら

できそうな気がする。

●

第十一章　兄と魔術の話（後書き）

誤字修正

返さなかったのだ何でだ→返さなかったのは何でだ

第十二章　魔術師と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十二章　魔術師と兄

●

白井紅太は最悪の事態を想定していた。
目の前の光景は最悪の事態よりもマシであると言える。
上条当麻の暮らす寮の七階。その通路に自称シスター、インデックスはゴミの様に清掃ロボットに扱われていた。
出血の量から、生命維持が難しい。つまり、瀕死の状態だと見て取れる。
清掃ロボットは別階に投げ捨て、白井紅太は容態を診たのだ。
上条当麻の方は、動けずに怒りに満ちていた。

「くそっ、何だよ。一体何だよコレは?！　ふざけやがって、一体どこのどいつにやられたんだ！」

突如の気配がした。
ソイツは、エレベーターの横、非常階段からやってきた。
エレベーター側の上条当麻と、通路奥側の白井紅太とインデックスを分断する様に割って現れた。

「うん?　僕達『魔術師』だけど?」

視覚情報から得たのは、白人の外人。身長は二メートルに近い。
顔は幼く見える。１４、５だろうか。何より、教会の神父の着ているような漆黒の修道服。
そして、赤髪に香水の強い匂い。顔には右目のまぶたの下にバーコードらしき刺青が刻みこんであった。
さらに、タバコを吸っており、耳にピアス。指輪がメリケンの様に

並んでおり、チンピラに見える。
これが、魔術師。
異質な存在であった。
これが、魔術師？
どう見ても不良神父か、ヤクザの若手だな。
その魔術師が口を開く。

「うん？　うんうん。これはまた随分と派手にやっちゃって」

魔術師はあちこち見回した。

「神裂が斬ったって話は聞いたけど……。まあ、血の跡がついてないから安心とは思ってたんだけどねぇ」

魔術師が最低でも二人。
神裂と呼ばれた人物の得物は刃物だ。
さらに、安心ということは傷つかないと思って襲ったと予測できる。
インデックス、自称シスターの行動は褒められたものではない。
追われている立場の人間なのだから、上条当麻の部屋に忘れた物など放っておけばいいものを律儀に回収しに舞い戻って来たのだ。
それは、逃走者としては正しくないと思うが、人間として高貴な物だと思う。
ならば、この傷ついて倒れた娘は良い奴である。
そして、それは、

「ばっかやろう」

上条当麻にも心当たりがあるようだった。

「うん？　嫌だな。そんな目で見られても困るんだけどね」

上条当麻の瞳に宿るものは憤り、もしくは自己嫌悪からくる怒りか。
瞳の奥に燃える炎は確かなものであった。

「ソレを斬ったのは僕じゃないし、神裂だって何も血まみれにするつもりなどなかったはずだ。『歩く教会』は絶対防御として知られるからね。本来ならアレぐらいじゃ傷もつかなかったはずだったのさ。まったく、何の因果でアレが砕けたのか。聖ジョージのドラゴンでも再来しない限り、破られるなんてありえないんだけどね」

その上条当麻に油を注ぐような言い方だ。

「こんな小さな女の子を、寄ってたかって追い回して、血まみれにして。テメェ。まだ自分の正義を語る事ができんのかよ！」

「だから、血まみれにしたのは僕じゃなくて神裂なんだけどね」

●

ツンツン頭に、女みたいな男。
インデックスの知り合い見たいだけど、僕には関係ない。
それに、魔術師の事を知っているとも思えない。

「もっとも、血まみれだろうが、血まみれじゃなかろうが、回収するものは回収するけどね」

「回収？」

意味が分からないって感じだね。
魔術師なんて言葉を知っているけど、全部筒抜けってわけじゃなさそうだ。
なら、インデックスは彼らを巻き込むのが怖かったのか。

それでも、僕は僕の使命を果たす。

「そう、回収だよ。正確には、ソレじゃなくて、ソレの持っている１０万３０００冊の魔導書だけどね」

明らかに不機嫌なツンツン頭より、女みたいな男の方が話が通じそうだ。

「ソレの持っている、この国で言う禁書目録って所か。それは教会が『目を通しただけで魂まで汚れる』と指定した邪本悪書をズラリと並べたリストの事さ。だから、君。注意したまえ。ソレが持っている本は、一冊でも目を通せば廃人コース確定だから」

「そうか！　インデックスの記憶（あたま）の中か！」

気付いたようだ。やはり、冷静さと頭の切れがあるのは女みたいな男の方か。

「当麻、完全記憶能力ってやつだ。『一度見たものを一瞬で覚えて、一字一句を完全に、永遠に記憶し続ける能力』って言えばわかるな」

説明ご苦労様。

「そうそう。ならいいかい？　ソレ回収するけど？」

●

「使える連中に連れ去られて、拷問と薬物で悪用しようって連中から僕達はソレを保護してあげようって言っているんだ」

「ほ……、ご？」

上条当麻は愕然とした。
この男は今なんて言いやがった？！
女の子を血まみれにしといて保護？

「てめぇ！　何様だ！」

頭で考えるより、魂が反応した。
目の前の、クソ野郎を殴り飛ばさないと気が済まない。

「ステイル＝マグヌスと名乗りたい所だけど、ここはＦｏｒｔｉｓ９３１と言っておこうかな」

右手を握りしめ、飛び出した先。
ステイル＝マグヌスと名乗った魔術師は口の端を歪めてタバコを揺らしているだけだ。
目測で魔術師との距離は１５メートル。
駆ける。

「僕達魔術師って生き物は、何でも魔術を使う時には真名を名乗ってはいけないそうだ。古い囚習だから僕には理解ができないんだけどね」

さらに距離を詰める。

「Ｆｏｒｔｉｓ――日本語では強者と言った所か。ま、語源はどうだって良い。重要なのはこの名を名乗り上げた事でね。僕達の間では、魔術を使う魔法名というよりも、むしろ殺し名かな？」

●

初めて見た。
確かにそれは存在した。
タバコを起点に爆発的に、一直線に炎の剣が生み出されたのだ。

●

魔術師と不幸。
不幸と友人。
配点：（邂逅）

●

後半最後の部分を書いている時にＰＣが落ちる。
たった数行、されど数行。
書きなおすのに倍の労力と、精神力がいる。

配置：（保存はこまめに）
原因：（暖房）

第十二章　魔術師と兄（後書き）

とある介入の続き。
行けそうな気がする。
飲み過ぎで死ぬ。寒さで死ぬ。

誤字修正
だんだん多くなってきた気がする。

第十三章　魔術師とシスターと兄と友人（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十三章　魔術師とシスターと兄と友人

●

「炎よ――」

魔術師。
ステイル＝マグヌスと名乗った。
Ｆｏｒｔｉｓ９３１とも名乗った。
この際、どちらの名でも良い。
問題なのは、自称だった魔術師達は実在して目の前で魔術を使った事にある。
火炎放射器並の炎。それは剣を型取り、さながら炎剣と呼べるものだ。
それをステイル＝マグヌスは上条当麻に向かって横殴りに叩きつけていた。
白井紅太は友人の安否を考えない。
あの、上条当麻の右手。
幻想殺し（イマジンブレイカー）は異能の力に対しては無敵の効力を発揮する。
だからこそ、上条当麻を駆除したと思い違いしてこちらに向かってくる魔術師に警告をする。

「話の通じそうな君。ソレ渡してもらいえないかい？」
「そりゃ、無理だな。だって、お前の相手はまだ諦めてねーからな」

●

今の一撃。
普通の人間ならば、溶けているはずの高熱だ。

だが、女みたいな男の視線は確かに物語っている。
やれやれ。
一応、忠告を聞いてふり返る。
こちらの話を聞いてもらうには相手の話を聞いてやることもやぶさかでない。
煙の中、生きているとは思えない相手に声をかけた。

「ご苦労様、お疲れ様。残念だったね。そんな程度じゃ１０００回やっても勝てないって事だよ」
「誰が、何回やっても勝てねぇって？」

火炎と黒煙が渦を巻いて吹き飛ばされ、その中央にツンツン頭がいた。
傷一つなくそこに佇んでいた。

●

「ったく、そうだよ。何をビビってやがんだ。インデックスの『歩く教会』をぶち壊したのだって、この右手だったじゃねーか」

バカな俺でも分かる事がある。
相手の魔術師も所詮、ただの『異能の力』だ。
なら恐れることはない。
未だ俺を取り囲む様に綺麗な円を描いて燃えている炎を、

「邪魔だ」

消し飛ばした。確信する。俺の右手は異能の力に対しては絶対だ。
だから目の前の魔術師は俺の『予想外』にうろたえている。
そう、相手はただの人間なのだ。

同じように炎剣が向かって来たが、右手で弾く。

●

「チッ！」

まさか。魔術を？
口の中で呟くが否定する。
魔術はおろか降臨祭（クリスマス）を交尾（デート）の日としか感じないとぼけた国に魔術師なんているはずがない。
目の前のツンツン頭からは『魔力』を感じられない。
後ろの女みたいな男もそうだ。
魔術師ならば、一目で見れば分かる。魔術師という『同じ世界の匂い』がしないのだ。
だから目の前の不条理に納得がいかない。
摂氏３０００度の炎の剣を何の魔術強化も施していない生身の右手で叩き砕くだと？

「インデックスの『歩く教会』は誰が壊したんだっけな」

背後から声が掛かる。
脳裏に走る。
インデックスの修道服『歩く教会』は絶対で、その結界の力はロンドンの大聖堂に匹敵する。
アレを破壊するには伝説にある聖（セント）ジョージのドラゴンでも現れない限り絶対に不可能だ。
しかし、現に神裂に斬られたインデックスの『歩く教会』は完膚なきまで破壊された。
一体、誰が？　どうやって？
その答えは目の前まで歩いてきていた。

あと一歩踏み込まれれば手が届くほど近い。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

目の前の夏服を着たツンツン頭が人間の形をしているからこそ。その皮の中には血や肉ではなくもっと得体の知れないドロドロした何かが詰まっているような気がした。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ――！」

その名は『魔女狩りの王（インノケンティウス）』。その意味は『必ず殺す』だ。

つまり、ツンツン頭。君は、死ね！

●

「ルーン――」

それは血まみれのインデックスの声だ。

「――『神秘』『秘密』を指し示す２４の文字にして、ゲルマン民族により二世紀から使われる魔術言語で、古代英語のルーツとされます」

白井紅太は驚く。こんなにボロボロで、血まみれでどうしてこんなに冷静に話せる？

「――『魔女狩りの王』を攻撃しても効果はありません。壁、床、

天井。辺りに刻んだ『ルーンの刻印』を消さない限り、何度でも蘇ります」

炎の塊『魔女狩りの王（インノケンティウス）』が上条当麻の幻想殺し（イマジンブレイカー）で消せないわけだ。

消滅した直後に復活している。

おそらく、消滅と復活を続けているのだ。

俺にステイル＝マグヌスの相手はできない。

よくて焼け死ぬ。普通は蒸発するように溶けるだろう。

運良くインデックスのそばにいるから攻撃は来ないのだ。

さらに、魔術という不可解なモノに戸惑いを感じる。

上条当麻に気を取られているステイル＝マグヌスを攻撃することは可能だ。

しかし、何を仕掛けているかわからない以上、むやみに攻撃を仕掛けていいものかと悩んでしまう。

勇敢と無謀の判断を冷酷にも弾きだす。

静観だ。

いま自分に出来る事は現状を俯瞰し、観察し、答えを出すために静観することだ。

相手が発火能力者（パイロキネシス）だったら相手に出来るのだが。

「お前がインデックスでいいんだよな？」

倒れこんでいるインデックスに話しかける。

俺としては初対面であり、自称シスターだと思っていた人物だ。

「はい。私はイギリス清教内、第零聖堂区『必要悪の教会（ネセサリウス）』所属の魔導書図書館です。正式名称はＩｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍですが、呼び名は略称の禁書目録（インデックス）で結構です」

「なら、インデックス。アイツをどうにかするには何をすればいい

？」
「それは――」

●

「灰は灰に――塵は塵に――吸血殺しの紅十字！」
左右から炎が上条当麻を引裂くように二本の炎剣が水平に襲いかかろうとしていた。
「飛べ！　上条」
聞いた。
マンションの七階から飛べと。
普通なら躊躇う。だが、上条当麻は白井紅太を信用した。
通路の先、空に身を投げた。

●

シスターと無能
シスターと有能
配点：（禁書目録）

●

戦闘が続きますね。
仕方のないことですが、日常のバカやっているのを書くほうが結構楽しい。
後三話位は戦闘です。たぶん。

妄言と虚言。
冬アニメが終わって一息。
作者が見ていたのはフェイトゼロ、境界線上のホライゾン、ベン・トー、僕は友達が少ない、灼眼のシャナ3です。
フェイトゼロ、境界線上のホライゾンは二期が決まっているので楽しみ。

●

第十四章　勝利、友情、兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十四章　勝利、友情、兄

●

「死ぬ！　ホントに死ぬ！　本当に死ぬかと思った！！　もっと早く助けて下さい！」
「喚くな！　ちゃんと助けただろーが。俺だって万能じゃないんです！」

命綱なしで七階から飛び降りた度胸は感心する。
白井紅太は上条当麻を抱えて思った。
こいつ、バカだけど俺を信頼しているな。
飛び降りた上条当麻を追うようにマンションの壁を蹴って落下速度を付けて先に落ちた上条当麻を空中で確保。そして、アスファルトの地面に着地。
普通なら死ぬか、骨折する程の衝撃だ。
その落下から着地までを無事に行えたのは白井紅太の能力、身体操作（ボディコントローラー）の恩恵だと言える。

●

身体操作（ボディコントローラー）は学園都市でも珍しい能力である。
肉体変化（メタモルフォーゼ）と似た能力であると思われがちだが、実際は異なる。
正確には肉体変化（メタモルフォーゼ）はその名の通り肉体の変化をする能力だ。
一方、身体操作（ボディコントローラー）は身体を操作する能力である。
つまりは、己の身体を思い通りに操作できるのだ。それは、身体を構成する血や肉、骨などを操作出来るという事である。
着地の瞬間、爆発的に脚全体の筋肉を操作し、特殊ゴムに近い衝撃緩和性の高い身体になるように下半身を操作をしたのだ。

身体操作（ボディコントローラー）は肉体変化（メタモルフォーゼ）の上位能力の位置づけあると白井紅太は考えた。
それは肉体変化（メタモルフォーゼ）が出来る事は身体操作（ボディコントローラー）にも出来ると言う事である。
工程は違えど、結果が同じに至る。
学園都市に3人しか存在しない肉体変化（メタモルフォーゼ）のデータを妹の白井黒子の許可の元、閲覧した事があった。
そのデータから予測したのだ。
顔を変化させる場合の工程は肉体変化（メタモルフォーゼ）は一回の能力で顔を変える。
それに対し、身体操作（ボディコントローラー）は顔の筋肉、骨格を操作して結果として顔が変わるのである。
ならば、白井紅太のように七階の高さから飛び降りて無事かと問われれば答えは否である。
出来るのは変形であり、白井紅太の様に身体強化は無理なのだ。

●

白井紅太は考える。
己の能力で出来る事は何か。
あの魔術師とは相性が最悪と言える。
人の肌は熱に弱い。鉄をも溶かす温度となれば防ぐのは不可能に近い。
能力を最大限に使ったとしても『魔女狩りの王（インノケンティウス）』に対して一秒間なら己の存在を保てると考えた。
体中の水分を盾にしたとして一秒持てばいいほうだ。
あとは溶けて死ぬな。
学生寮の二階手すりに張り付いてこちらを見ている『魔女狩りの王（インノケンティウス）』を相手に戦術を練ったのだが結果は考えた通り、惨敗になる。
だが、別の思考も働いていた。
それは学生寮の外には『魔女狩りの王（インノケンティウス）』は出られない。
それが、ルールだ。

インデックスの話によれば刻まれているルーンを破壊、もしくは無効化できればあの『魔女狩りの王（インノケンティウス）』は消える。
ルーンはテレホンカードぐらいの大きさで学生寮のあらゆる場所に貼り付けてあった。
一番近くのルーンが刻まれた物を見る。
明らかにコピー機を使った大量生産された自作の紙切れにルーン文字と怪しげな記号が書かれていた。
ステイル＝マグヌスと名乗った魔術師は案外細目なんだなぁと思う。
そして、ルーン文字と記号をかいた紙をコピー機で量産するステイル＝マグヌスを想像してなんだか切なくなった。
それを上条当麻に伝えてみた。

「なんつーか、ずるいな。あんな偽物で効果あるのかよ。あと、アイツが地道にセロテープで紙を一枚一枚貼り付ける所を想像すると魔術ってのも結構大変なんだなぁと思う。って、なんで敵に同情しなきゃいけないんですか？！」

知るか。
たぶん魔術だ。
魔術には何かしらの一定のルールがある。
そのルールを守り効果を発動させる。

「ってか、あんなに派手にやってよく火災報知器が動かねぇな」
「それだ！　上条当麻！」

●

ステイル＝マグヌスは頭の血管が切れる程に怒っていた。
たかだかスプリンクラーの水で『魔女狩りの王（インノケンティウス）』の炎が消えるわけがない。

魔術を知らない相手だから仕方のない部分もあるだろうが、馬鹿馬鹿しい。
そんな理由でびしょ濡れにされたのか、僕は。
忌々しい火災報知器を睨みつけた。
さて、どうしようかな。消防隊がやってくると面倒な事になるかもしれない。
ふむ。
手っ取り早くインデックスを拾って立ち去ろう。
幸い奴らは飛び降りた。
ならその隙に回収を終えても文句は言えまい。
それに、『魔女狩りの王（インノケンティウス）』に再び立ち向かって来ることもないだろう。
ツンツン頭はギリギリだったし、女みたいな男は戦う気が見えなかった。
きっと女みたいな男の方が消防隊に通報しているはずだ。あの細身で戦うという事はないだろう。
だから、学園都市に不法侵入した僕達に対して然るべき対処をするだろうね。
厄介な相手はどちらだったんだろうね。まあ、今となっては関係のない話だ。
背後から音が聞こえた。
エレベーターが動く音であった。
一体誰だ？
夏休みの夕暮れという時間帯だ。生徒たちは完全に出払っていて学生寮が無人状態である事は確認済みだ。
そして振り向く。
体内の小刻みに震えている理由も分からずに。
「ったく参ったぜ。正直、ナイフ使ってルーンを刻まれていたら勝ち目ゼロだったよ」

ツンツン頭だ。
自動追尾である『魔女狩りの王（インノケンティウス）』はどうした？
その疑問に答えたのは、
「何万枚貼ろうと所詮コピー用紙は紙だ。紙は水に弱い。わりぃな。お前の苦労はボタン一つでパァだ」
背後、インデックスの側に女みたいな男が立っていた。
どうやって七階に？
その疑問を解決するよりも、優先すべき事がある。
「――『魔女狩りの王（インノケンティウス）』！」
叫んだ。
そして、ツンツン頭の背後、エレベーターの扉を溶かして這いでてきた。
「は、はは。すごいよ。君達。君達ってば格闘センスの天才だね！だけど経験が足りないかな。コピー用紙ってのはトイレットペーパーじゃないんだよ。たかが水に濡れた程度で、完全に溶けてしまうほど弱くないのさ！」
理想的な挟撃だと思ったが、甘いね。
「邪魔だ」
一言。ツンツン頭は振り返りもせず『魔女狩りの王（インノケンティウス）』を吹き飛ばした。

「バカな！　僕のコピー用紙はまだ死んでないのに！」
「コピー用紙は破れなくても、水に濡れればインクは落ちる」

焦燥。思考停止。
対して相手は翔ける。
振りかぶり、

「行け！　上条」

迫ってくる拳を他人事のように眺めて、そのまま顔に衝撃が走った。

●

魔術師倒れる。
無能と有能が交差した力はなんであるのか
配点：（幻想殺し）

●

第十五章　兄と教員（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十五章　兄と教員

●

上条当麻の部屋。
インデックスに簡易的な治療をした。
それは、家にある裁縫セットを使用した麻酔なしの縫合であった。
それに対して上条当麻は苦言を投げた。
しかし、白井紅太は答えた。

「インデックスを殺したいのか？」

上条当麻は絶句する。
インデックスは『外の人間』だ。
ＩＤを持たない部外者を医療機関に任せるわけもいかず、碌な治療も受けさせてやれない。
だから、緊急措置として家庭の裁縫セットで傷を縫合して命をつなげるのだ。
ただ、それはインデックスに取って相当堪える痛みだ。
それを苦言としたのだ。
結果としてインデックスの出血は減ったが、完全に止血されているわけではない。
インデックスの持つ１０万３０００冊の中に傷を治す魔術はないのか？
上条当麻は問う。

「ある、けど……。君達じゃ……無理」

それは上条当麻の幻想殺し（イマジンブレイカー）が原因ではなく、超能力者というものが

原因なのだ。
インデックスの発した言葉は、凍えるほど冷たかった。
能力開発を受けた人間の脳では魔術というシステムは使うことができない。
インデックスを唯一救える魔術を使うことはできないのだ。
つまり、学園都市の人間で彼女を救える生徒はいない。
目の前に人を救う方法があるのに誰も彼女を助けることが、できない。

「ちくしょう！」

●

白井紅太は尊敬を持っていた。
その相手はインデックスである。
縫合の時、彼女は叫ぶことも泣くこともなく耐えた。
それに、危険を承知で上条当麻を巻き込む前にフードを回収しようともした。
こんな小さな女の子。
だけども、強い。
そして、その強い女の子が死にそうでもある。
大切な娘。妹の顔とインデックスの顔が折り重なるような錯覚に震える。
どうも、年下には甘いな。
記憶の関連付けから年上なのに年下の容姿の存在が思い浮かんだ。
答えだ。

「魔術って、一般人なら誰でも使えるんだな？」
「え？　うん」

学園都市の学生が魔術を使えないのであれば、学園都市の超能力を開発する側の教師ならただの人間のはずだ。すなわちインデックスの魔術を使える一般人に当たる。

「おい、紅太。まさか、先生か？」

「そう、月詠小萌先生だ」

●

ボロいという言葉通り。ボロの木造二階建てのアパートだ。

通路に洗濯機が置いてある所を見ると部屋に風呂場があるとは思えない。

白井紅太が携帯から調べだした小萌先生の住所に三人はたどり着いた。

上条当麻はどうやって白井紅太が小萌先生の住所を調べたのか謎だった。

それを聞いたら、

「は？　小萌先生は入学式の当日に教室でクラス担任挨拶の時に何かあったら相談するですよーって連絡先教えてただろ？　あとは番号から住所を調べたんだけど。上条、お前、俺をストーカーとか思ってね？」

「いえいえいえ。まさか、まさか」

確かそんな事も会ったような。

ストーカー疑惑なんてまさか。

シスコンだろーが。

「はいはーい。今開けますよー」

チャイムの音に反応が聞こえた。
ドアががちゃりと開いて、緑のぶかぶかパジャマを着た小萌先生が顔を出した。

「うわ、上条ちゃんと、白井ちゃん？」
「ちょっと色々困ってるんで、入ります。はいはい、上条もな」
「お邪魔しまーす」

紅太って結構強引だな。

「ちょ、ちょちょちょっとーっ！」

紅太の横に押された小萌先生は慌てて俺達の前に立ち塞がる。

「せ、先生困ります。いきなり部屋に上がられるというのは。部屋がすごい事になっているとか、ビールの空き缶が床に散らばっているとか灰皿のタバコが山盛りになっているとか、そういう事ではなくてですね！」

だが、小萌先生の抵抗も虚しく、紅太に抱え上げられて、部屋に侵入を許してしまったのだ。
インデックスは俺が背負っているのだから実力行使は紅太の意思による行動であって、決して俺は関係ない。

部屋の中。
競馬好きのおっさんが住んでそうな部屋という感想がまず思い浮かんだ。
ボロボロの畳の上にビールの缶がいくつも転がり、銀色の灰皿にはタバコの吸殻が山盛りにされていた。
部屋の真中にはちゃぶ台まであった。

「ぎゃああ?！　その娘どうしたんですかー?」
インデックスの事を説明していなかった。
あと、今気づいたんかい！
「簡単に説明すると彼女は怪我を負っている。訳あって病院に搬送は不可。さらに死にかけで助けるすべが月詠小萌先生にしかできない。よって、彼女の指示の元、小萌先生は適切な処置をしていただきたい。端的に言えば、困ってるから助けろ」
「最後！　もっと丁寧に！」
こんな状況でツッコミを入れさせるな！
「こんな状況で言うのも何ですけど、タバコを吸う女の人は嫌いなんです?」
関係ねー！
だが、不意にインデックスが言葉を発した。
「出血に伴い、血液中にある生命力が流出しつつあります」
背中から聞こえた声は冷静であった。
「取り敢えず、寝かそう」
いつの間にか紅太が小萌先生の部屋にインデックスを寝かせるだけのスペースを作っていた。
背中の傷が床に触れないように、うつ伏せに寝かせる。
インデックスの服には縫合したにも関わらず赤黒い染みがあふれて

いた。

「警告、第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を超えたため、強制的に『自動書記（ヨハネのペン）』で覚醒（めざ）めます。現状を維持すれば、ロンドンの時計塔が示す国際標準時間に換算して、およそ２０分後に私の身体は必要最低限の生命力を失い、絶命します。これから私の行う指示に従って、適切な処置を施していただければ幸いです」

小萌先生はぎょうとしたようにインデックスの顔を見た。

「そういうわけで、インデックスが言った様に、小萌先生。お願いします。俺達じゃ、駄目なんです」

紅太は無表情だった。

コイツの、怒った顔や、悲しい顔を見たことがなかった。

笑っている顔や、からかっている顔の印象が強すぎて、紅太の印象は明るい奴、良い意味の嫌な奴だったが、今はどうだろうな。

●

生徒と教師。

導くのは誰か。

配点：（先生）

●

第十五章　兄と教員（後書き）

誤字修正

第十六章　生徒の兄と教員の大人（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十六章　生徒の兄と教員の大人

●

上条当麻は自分の能力を恨む。
部屋の中で何が起こっているか分からない。
ただ、治療の邪魔になるから出ていくしかなかった。
片や、俺に付き合う形で白井紅太も部屋の外にいた。

「建物全体が揺れたな」
「ああ……」

白井紅太の言葉に心ここにあらずといった生返事を返す上条当麻だった。
一旦、道路まで二人は移動して、自販機の明かりの元にいた。

「なあ、これからどうなるんだろうな？」

上条当麻の問に俺は考える。
小萌先生に託したはいいが、インデックスが回復した所で先生の立場上、『外の人間』を警察か学園都市の理事会へ伝えるだろう。それが大人として、教師としての役目である。
手段を選ばない方法で解決するのであれば、

「誤魔化すにしろ、小萌先生に協力してもらうにしろ、前途多難だな。所で上条、小萌先生とセックスできるか？」
「ぶっ！　ゲホ、気管にコーラが……。いや、紅太さーん！　何言ってんの！　結構シリアスモードで聞いたじゃん？！」

教師と生徒が肉体関係を持てば問題がある。
それは大人である教師に責任がかかり易い。
生徒と肉体関係を持った教員というのを免罪符にこちらの要求を飲んでもらう心算なのだ。

「悪魔ですかー？！　それに、幾ら小萌先生でもちょっとそれは……」

可哀想だと。

「しかしなぁ、今日あった事を忘れてもらうのが一番いいのだが、そんな都合のいい話はあるわけもないし、最終手段として頭の隅に入れておけ。それにこれ以上小萌先生には魔術を使って欲しくない」

魔術だろうが超能力だろうが、代償なしに使えるはずもない。

「それには同意するけど、何か手はないのか？　小萌先生とセックス無しで！」
「飛車角落ちの上にさらに、金銀落ちでプロ棋士に勝てって言っているようなもんだぞ、それ」
「でもそれって、頑張ればできますですよー？」

さて、いつから聞いていたのか、小萌先生がソコにいた。
インデックスの治療を終えてこちらを呼び戻しにきたのだ。

「まあ、厳しい事に変わりませんが、それより、シスターちゃんが呼んでますよー」

上条当麻はココぞというチャンスにかけ出して小萌先生の部屋に向かった。

野郎……。俺を捨て駒にしやがった。

「白井ちゃん」

「はい」

見た目が小学生の小萌先生は教員である。

「上条ちゃん達が一体どんな問題に巻き込まれているか分からないですけど、それが学園都市の中で起きた以上、解決するのは貴方達生徒じゃなく、私達教師の役目です。子供の責任を取るのが大人の義務です。上条ちゃん達が危ない橋を渡っていると知って、黙っているほど先生は子供ではないのですよ？」

それは正しい言い分であり、ただ真っ直ぐに見つめる月詠小萌の瞳は強い。

年の功と言ったら泣くだろうが、さすが年上で教師やっている女性（ひと）だ。

だからこそ、コレ以上巻き込むのは憚られる。

「それでも、小萌先生をこれ以上巻き込みたくないです。上条も同じ考えだと思います。だから――」

「白井ちゃん」

言葉を遮られ、

「私は明日スーパーに行ってご飯の買い物をしなくてはいけないです」

全く関係のない話を続ける。

「先生はお買い物に夢中になってると色々と忘れるかもしれません」
それは、気遣いであった。
この人には敵わない。
心から尊敬できる教師を持って良かった。

●

翌日、小萌先生は昨夜言った通りスーパーに買物に出かけた。
上条当麻もインデックスも小萌先生に再び魔術を使わせてはいけないという話になり、やはり魔術は危険なものであると知った。
上条当麻は小萌先生に錬金術を使わせたかったみたいだが、それは意味のないことであった。

「純金の変換はできるけど、今の素材で道具を用意するとこの国のお金だと……えっと、七兆円ぐらいかかるかも」
「……超意味ねぇ」

だがそれは同時にある事を示唆させた。
白井紅太は思う。鉛を金に変える事ができるのなら、それは、

「原子配列変換ができるのか？」

簡単に言えば、核融合施設がなくても核融合を引き起こせるということになる。

「？？？」
「まて、そんな不思議そうな顔すんな！　アレだ！　どれだけすごい事かって言うと、アトミックなロボとか起動戦士が普通に作れちゃうぐらいすごいんだぞ！」

上条当麻は斜め上の考えを持っていた。男のロマンである。

「なにそれ？」

くだらないと言う感じでバッサリ切り捨てられた。

時刻は昼頃だ。

唐突に白井紅太は言う。

「やべ、黒ちゃん成分が足りん」

「は？」

「愛しの黒ちゃんを求めている。一日近く顔を見てないじゃないか！」

上条当麻はがっくりと肩を落として言う。

「行けよ。全く、シスコンめ」

上条当麻は思う。白井紅太の妹の顔は知らないが似た顔をしていると聞いた覚えがある。

ならば、可愛いこと間違いない。だが、一度も合ったことも無ければ、どんな人物なのかもあまり知らないのだ。

その辺りのガードは固いし、また妹に付いて詳しく知りたいとも思わない。

知ろうとすれば、青髪の如く、ぶん殴られるからだ。

●

生徒思いの教師。

生徒は教師を尊ぶ。

配点：（生徒）

●

この章辺りから徐々に原作から改変された流れになります。

今日から休みに入る人も多いでしょうから更新。

第十六章　生徒の兄と教員の大人（後書き）

誤字修正

第十七章　レベルアッパーと兄妹（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十七章　レベルアッパーと兄妹

●

上条当麻が伝染った。
そう表現するしかない。
白井紅太は佐天涙子が不良に絡まれている所に遭遇したのだ。
佐天涙子の勇気は認めるが、然るべき所に連絡すべきだと思った。
だが、

「バッテリー切れで……」

ソコへ俺が現れたわけだ。佐天涙子のヒロイン力が俺を引き寄せたのか、上条当麻のフラグ体質が伝染ったのか。

「なんだテメェ！」

こうして不良の相手をすることになったのだ。
相手は三人。リーダー格のやつは金髪にピアスに歯が数本抜けていて、まさしく不良の言葉が似合いそうな人物だ。

「何かと思えば、たかが高校生かよ……。俺達に、ブガッ」

あーあ、悠長に脅しているもんだから駄目なんだ。
顎を掠めるつもりがきっちりと右頬に拳が入った。

「どんな能力者かしらねーが、ムカツクぜ！」

オールバックの細目は鉄柱を浮かしてそれを投擲してきた。

●

「すごいなぁ」

全く、心配のない相手を見る。
佐天涙子は不良三人に絡まれて絶望していた所に現れた救世主に絶対の信頼を置いていた。
投擲された鉄柱を地面スレスレに走り避けてオールバックの相手を殴り倒したのだ。
それを辛うじて眼で捕らえられたのは佐天涙子が彼を凝視していたからだろう。

「カカカッ。おもしれー能力だな。加速装置でもついてんのか？」

不良の男にもそれは見えていたようだ。
だが、白井紅太は余裕の笑みを見せる。

「どうだろうな」

紅太さんの身体がブレてた。
決まったかな？
しかし、その拳は虚を突いただけであった。

「紅太さん。後ろ！」

私の声に反応したのか、相手の蹴りを防いだ。
そして、不良の言葉を返す様に、

「面白い能力だな」

言った。そして、相手の追撃をバックステップで回避して、ビルの中へ二人は消えていった。

●

「あら？　佐天さんではないの。こんな所でどうしましたの？」

佐天涙子の元に現れたのは白井黒子であった。
倒れている二人の不良を見て、さらにその被害者を見て白井黒子が全てを理解したように、

「不良に絡まれていましたの？」
「そ、そうです。そこに紅太さんが、助けに来てくれて、今あの人はビルの中に不良と……」

言いかけて、それが轟音によってかき消された。
白井黒子は思う。不良が危ない。

「お兄様って、自分の身内とか友だちに手を出した相手に容赦無しですの」

それはつまり、

「ビ、ビルが……」

破壊工事のような震撃音が鳴り響いている。

「はぁ。取り敢えず、警備員（アンチスキル）に連絡して、被害者が出る前に助けだしますわ」

空間移動（テレポート）で移動する。

●

「冗談じゃねぇ！　アイツ正気か？！」

まさか、ビルを支える柱を素手でぶっ壊すなど悪い夢を見ているようだった。

相対する敵は、

「三分あればこの程度のビルならぶっ壊せるんだぜ？」

などとほざくもんだから、

「は、やれるもんならやってみな！」

挑発したのが間違いだった。

わざわざ逃げまわって最上階まで来たのは俺を嵌める為の策略だったわけだ。

床をぶち抜いて下の階へ行って震撃音が響いたのを聞いて見てみりゃ、柱が壊れていた。

悪夢だ。

さらに下の階からまだ、音は響いている。

確実に下の階層の柱を壊している音だ。

「まさか本当にビルを潰そうとするなんて、イカレてやがる！！」

ビルが軋み悲鳴を上げながら振動する。

そして、

「うわあああ」
落ちてきたビルの一部に絶叫した。

●

崩壊するビルの外。
「ハア」
「嗚呼、あぁぁ」

白井黒子は間一髪で不良を助けだした。
兄である紅太を想う。
全く、めちゃくちゃですわね。
背後から声が掛かる。

「やっぱ黒ちゃんは良い子だねー」
「頭を撫でるついでとばかりに抱きつくのやめてくれません？」

昨日ぶりである。それでも、少し男らしくなったと白井黒子は感じた。
男子三日会わざれば刮目して見よとはいいますが、何かあったんでしょうね。

「取り壊す予定だから別によかったよね？」
「まあ、そうですけど。こういった不良は私達、風紀委員（ジャッジメント）に任してくださいと言ってますの」
警備員（スキルアウト）が集まり始めてどうしたものかと考える。

幻想御手（レベルアッパー）とこの不良達は関係ありそうだ。

「いやー、結構楽しめたよ。たぶん幻想御手（レベルアッパー）絡みだね。ほら、涙子が絡まれた時にそういう話してたみたいだし」

心を読んでますの？

グッと言葉を我慢して兄に忠告する。

「あまり事件に突っ込まないでくださいですの。お兄様は一般人なのですから」

「ん。黒ちゃんに助言」

よしよしと頭を撫でて、

「幻想御手（レベルアッパー）を欲しがるのは無能力者だよ。友人含めて所持品を調べた方がいいかもね。灯台下暗しって言うし。この前のメールにあったけど、幻想御手（レベルアッパー）って音楽ソフトならその曲自体に何かあるかもね」

事件の推測を述べた。

この兄は何なのだろうか。

プロファイリングの知識でも持っているんではなかろうか。

兄の助言を記憶に刻む。

「検討に値する情報ですわね。って尻を撫でるのはセクハラですわよ！」

関連記憶だ。

己の言葉を忘れさせない為に行った行為である。はず。

「うーん。やっぱり黒ちゃんは可愛いなぁ」

やっぱり勘違いだろうか。

●

つかの間の兄妹。
兄と妹。
少しだけ物語に交わりあう。

配点：（幻想御手事件）

●

久々の黒子登場。
コミケ参加者の人達の退屈しのぎの為に更新。
作者は実家でのんびり。
ではコミケ参加者の方は身体に気をつけて戦って下さいね。

第十七章　レベルアッパーと兄妹（後書き）

誤字修正

第十八章　魔術師たちと兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十八章　魔術師たちと兄

●

雑居ビルの屋上。月詠小萌宅から６００メートルほど離れたソコに二人の男女がいた。
片方は長身の男で双眼鏡を片手にタバコを咥えていた。
片方はやはり長身で、女であった。
女の方は腰に長さ二メートル以上の日本刀を帯びており、ジーンズに白い半袖のＴシャツであった。
ジーンズは左脚の方だけ何故か太ももの根元からバッサリ切り落とされており、Ｔシャツは脇腹の方まで布を縛っていた。
日本刀は革のベルトに挟むようにぶら下がっており、西部劇の保安官が拳銃の代わりに日本刀を下げているといった格好である。
二人共まともな格好とは思えないものであった。
その二人は観察をしていたのだ。

「それで、神裂。アレは何なんだ？」
「それですが、ツンツン頭の少年の情報は特に集まっていません。少なくとも魔術師や異能者といった類ではない、という事になるのでしょうか」

ステイル＝マグヌスは考える。
ツンツン頭の方。いくら、インデックスからの助言があったとしても、アレが一般人なわけがない。
それに、もう一人の女みたいな男が気になっているのだ。

「女みたいな男の方は？」
「学園都市で言うレベル４。身体操作（ボディコントローラー）という能力者らしいです」

神裂火織が言い淀むという珍しい瞬間にステイル＝マグヌスは笑みを浮かべた。

●

「それで？　神裂は彼に一目惚れでもしたのかい？」
「そんなわけありません！」
腰まで届く長い黒髪ポニーテールを揺らして怒鳴った。
視力８．０の彼女の眼には白井紅太が部屋を出ていくのが鮮明に見えていた。
「彼の能力は学園都市でも珍しいもので身体操作（ボディコントローラー）は彼一人。肉体強化魔術に近いものだと思いますが……」
視線の先の人物と眼があった。
「が？」
彼はこちらを見て笑ったように見えた。
「能力の詳細は不明。夏休みの期間に再度能力測定が検討されています」
彼の名は白井紅太。
「ツンツン頭の方ですが。ステイルの話が正しければ、アレだけの戦闘能力が『ただのケンカっ早いダメ学生』という分類となっている事が問題ですね」

この学園都市は超能力者量産機関という裏の顔を持つ。
五行機関と呼ばれる『組織』に、ステイルや私、その上の『組織』はインデックスの事を伏せているとはいえ、事前に連絡を入れて許可を取っている。

「情報の意図的な封鎖、かな。しかもインデックスの傷は魔術で癒したときた。神裂、この極東には他に魔術組織は実在するのかい？」

二人の勘違いは上条当麻達は五行機関とは別の組織を味方につけていると踏んだことだった。
他の組織が、上条達の情報を徹底的に消して回っていると勘違いしたのだ。
それをステイル＝マグヌスは最大限に勘違いをした。

「あの、女みたいな男。随分と頭が回る。彼がブレーンである可能性が高いと思うが……」
「……。この街で動くとなれば、何人も五行機関のアンテナにかかるはずですが、まさか彼が？」

そのステイル＝マグヌスの勘違いに真面目な神裂火織は思考する。

「敵戦力は未知数、対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね」

さらに神裂火織は先程の白井紅太がこちらを見て笑った事にある種の懸念をしていた。
その白井紅太はただ、今日も天気が良いなぁと空を見て笑っただけであったのにもかかわらずに。

「最悪、組織的な魔術戦に発展すると仮定しましょう。ステイル、

あなたのルーンは防水性において致命的な欠点を女みたいな男、つまりは白井紅太に指摘されたと聞いてますが」

神裂火織は白井紅太が魔術の弱点を見抜いたと勘違いしていたのだ。本当はインデックスの助言から弱点を突いただけである。

しかし、魔術戦というのは先の読み合いである。

戦闘が始まった時点で既に敵の罠にハマっていると考え受けては相手の罠を読み、逆手に取り、さらに攻め手は反撃を予測しなければならない。

常に変動する戦況を１００手、２００手先まで読まなければならない。それは戦闘と言うよりもとてつもない頭脳戦と呼べる。

そういった意味でも、『敵の戦力は未知数』というのは魔術師にとって大きな痛手なのだ。

上条当麻の謎の右手、白井紅太の詳細不明な能力。これらが魔術師にとって脅威となっていたのだ。

●

片側三車線の大通り。

ずらりと並ぶ大手デパートには誰も出入りしていない。

さらには車道には車の一台も走っていなかった。

「ステイルが人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」

神裂火織は相対する相手に言葉をかけた。

ステイルが言う女みたいな男。

白井紅太を相手にする。

ステイル曰く、

『どうも彼とは相性が悪そうだ。だから神裂。相手は君に頼むよ』

本当に女みたいな顔。それにステイルが何をどう思ったかは敢えて考えないでおこう。
また、神裂火織自身も白井紅太と対峙することを望んでいた。
ステイルが頭の回転が早いと称した為、こちらの話が通じる相手であると踏んだのだ。
ツンツン頭の上条当麻の裏にあるはずの『組織』の情報を聞き出すためにも、

『そういう事ならやっぱり、女みたいな男の相手は神裂がいいよ』

ステイルが言ったので望んだ結果として白井紅太と相手するのだ。

●

魔術師達の頭脳戦。
能力者達の頭脳戦。

配点：（勘違い）

●

第十八章　魔術師たちと兄（後書き）

誤字修正しました。

第十九章　悩む兄と悩む魔術師（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十九章　悩む兄と悩む魔術師

●

Ｔシャツをまくり上げてヘソをだし、ジーンズの左側は太もも付け根辺りで切れており、黒髪のポニーテールに長身。それに夏なのにロングブーツ。年齢は１８、１９位か。
こういった手合いは上条当麻が担当すべきだと考える。
正直、エロイ格好だな。
白井紅太は魔術師に対して思考した。
二メートル近い日本刀。
アレでインデックスを斬ったわけだな。
それにステイルが人払いのルーンを、と言ったので確実に魔術師だ。
さて、インデックスを追う魔術師は一体何人でどんな思考でインデックスを追っているのだろうね。
目的はインデックスの回収という名の保護だ。
道徳心とか人権とかが通じなさそうな連中である。
状況として、人払いをしている。つまり、見られたくないような事をするわけだ。
もちろんエロいことではなく、殺し合いとか殺伐としたものであろう。

「この一帯にいる人に『何故かここには近づこうと思わない』ように集中を逸らしているだけです。多くの人は建物の中でしょう。ご心配はなさらずに」

何の心配か問いただしたい所だ。

「白井紅太ですね」

世間話のような気楽さだ。殺気も感じない。
相手の望みは戦闘ではなさそうだ。それでも、気を抜けない。
この女魔術師の評価は笑顔で人を殺せる殺人者程の危険度を設定しておこう。

「アンタは？」
「神裂火織と申します。……、できれば、もう一つの名は語りたくないのですが」
殺し名というやつだろう。
「なら神裂火織でいい。もう一つのは物騒だからな」
「ええ、そうでしょうね」
同意を得たが、やはり魔術師である相手に隙はない。
ステイル＝マグヌスの件から恐らく何かしら下準備の必要な魔術が既に用意されていると考えるほうがいいだろう。
ならば、相手が動くのを待ち、後の先を取る方がいいな。

●

神裂火織は若干の焦りを心に感じながら相手の出方を伺っていた。
実の所、世間話をしつつ相手に探りを入れて情報を聞き出すと予定していたのだが、思えば異性との話はステイル以外ではあまりしたこともなく、また、一般的な世間話というのをどういった風にすればいいのか分からなかったのだ。
つまり、初対面の相手で異性との日常会話というものがわからなくて、

「……」
結局睨み合う形となってしまった。
「ハア」
ついにため息までつかれた。
気まずい雰囲気が流れる。
「神裂火織、君、年幾つ？」
「はあ？」
長身に大人びた容姿は自覚している。
その為年不相応の年齢に見られやすい。
「18ですが……」
「年上だな。神裂さんとでも呼べばいいか？」
相手に驚きはなかった。
結構珍しいことだと内心で思った。
「どうとでも……」
「神裂お姉ちゃん」
ゾワッと背筋に寒気が走る。
「神裂で結構です！」
「なら、神裂。何の用だ？　考えるに、話し合いが目的みてーだけど」

ステイルの評価は正しいものであった。
状況から推察してこちらの意図を読み取ったのだ。
脅威になる。同時に交渉相手に相応しいと考える。

「率直に言って、彼女、インデックスを保護したいのですが」
「はいどうぞ、と言いたい所だけど、理由を聞いてもいいか？」

それは、

「彼女の持つ禁書目録の回収と保護が私達の目的です」
「そりぁ聞いた。あんたらの目的だな。理由だよ。インデックスを追う理由」

語るべきでしょうか。一瞬躊躇して、口を開く。

「彼女は、私の同僚にして――、大切な親友なんですよ」

●

白井紅太は数多くの返答パターンを思考していた。
その中でも確立の底辺にある返答パターンが返されたのだ。
魔術師というものに初めてあったのはつい先日だ。
ステイル＝マグヌス。
彼の魔術は強大であった。だが、その割に決定打に欠けると感じていた。
人目につかない様にインデックスを追っていたみたいだが、多少人目につこうとも手段を選ばずにインデックスを襲えばもっと簡単に捕らえられたのではと考えていた。
可能性として顔見知りか、もしかしたら友人関係にあったのかもしれないと最悪のパターンを考えて頭の隅に置いていたのだ。

俺のいない間に上条当麻が聞いた話だとインデックスは一年位前からの記憶がないと上条当麻に聞いた。
過去がない。
だからこそ、友人の顔も分からずに、追われている理由も分からずに逃げた。
胸糞の悪い思考であったが、それでも可能性がある以上、白井紅太の脳はその結果を弾き出していた。

「２５６通りある中で最悪の組み合わせのパターンだな」

神裂は先程までの泣き出しそうな顔から、意味が分からないという顔へと表現が変化していた。

「インデックスの記憶が一年程前から無いということに関係があるのか？　あるんだろうなぁ……」

できれば敵であって欲しかったが、考えうる最悪のパターンからすると魔術師達は味方である。
上条当麻の不幸が伝染ったな。
不幸が伝染ったと考えると、自分が最善で有って欲しいと願う逆転の最悪の選択が多分正しい正解だ。
最善であるパターンは残虐な魔術師が相手でインデックスをモノ扱いするような外道が良かった。
それなら、躊躇無く相手を”殺せる”から。

●

女と男。
交渉と話し合い
配点：（エロ魔術師）

第十九章　悩む兄と悩む魔術師（後書き）

今年最後の更新です。

作者は2日くらいまでサボるので感想返せませんので、よろしく

誤字修正

第二十章　神裂火織と兄（前書き）

白井黒子の兄。
そいつが引き起こす話。
エロ、ＴＳなど注意が必要。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第二十章　神裂火織と兄

●

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えがありますか？」

神裂火織の問だ。
白井紅太は答える。

「１０万３０００冊の正体だな。インデックスがそんな天才には見えんがそうなんだろう」

白井紅太は神裂火織の弱々しい声と痛々しい姿に相手がそのへんにいる女の子に見えた。
脳内に記憶チップでも詰め込んで記憶させているわけじゃなくて天然の完全記憶能力者だとインデックスは言った。
記憶チップだったらどれだけ楽にインデックスが助かったことやら。

「あなたには彼女がどんな風に見えますか？」
「強くて可愛らしい女の子だ。まあ、俺の妹には劣るが……」

睨まれたが事実だ。
ソコは曲げてはいけない俺のジャスティス！

「……」

ジッとその瞳が俺を見定めるように睨んでいるが、

「ま、話を続けろよ」

続きを催促する。

「彼女は魔術師達を相手に異能に頼ることもなく、魔術にすがる事もなくただ自分の手と足だけで逃げる事ができると思いますか？」

さらにと前置きをして、

「彼女は紛れも無く天才です。一年間も私達の追撃から逃れ続ける事ができています。でも、『必要悪の教会（ネセサリウス）』という『組織』そのものを敵に回せばどうなるか貴方ならわかるでしょう」

神裂火織の独白のような言葉は続き、

「扱い方を間違えれば天災となるレベルの彼女を教会が彼女をまともに扱わない理由です。怖いんですよ、誰もが」

強力過ぎる力が怖いと。

「彼女の脳の８５％以上は、インデックスの１０万３０００冊に埋め尽くされてしまっているんですよ。……残る１５％を辛うじて動かして生きてます」

「『必要悪の教会（ネセサリウス）』ってのはインデックスの所属している教会で神裂も同じで同僚なんだよな？　それが、どうして同僚のインデックスに悪い魔術師だ、と言われる？」

神裂は一瞬だけためらって、答えた。

「何も、覚えてないんです」

●

「私達が同じ『必要悪の教会（ネセサリウス）』の人間だという事も、自分が追われている本当の理由も、覚えてないから、自分の中の知識から判断するしかなくなった。禁書目録を追う魔術師は、１０万３０００冊を狙う魔術結社の人間だと思うのが妥当だと考えてしまう！」

神裂火織は悲痛に叫ぶ。

対して白井紅太はコレといった反応も見せなかった。

「つーことは、インデックスの記憶をお前達が消したのか」

神裂火織はズキリと心に痛みが走る。

肉体的な痛みは耐えれるが、この心の痛みはやはりきついものがある。

彼の表情からは何も読み取れない。

私はどんな顔をしているだろうか。

「そうしなければ、インデックスが死んでしまうから」

吐く。真実を。

しかし、目の前の人物は、

「何故死ぬのか簡潔に述べよ」

冷徹だった。

「完全記憶能力による記憶過多で脳の許容を超えて……」

「脳がパンクしてパーンって爆発して死ぬ？」

「はい……記憶の消去はきっかり一年周期で行います。あと、３日

が限界です。ちょうど3日後のその時でなければ記憶を消す事ができないんです。あの子の方も、予兆となる強烈な頭痛が現れるはずです」

伏せた視線を上げて彼を見ると、笑っていた。

「何がおかしいのです！」

「ははは、そりゃ、笑うさ。だって、”インデックスの問題は解決した”ようなもんだからな」

聞く耳を疑う。

そして、

「立ち話も何だからそこいらのファミレスで飯でも食わね？」

●

神裂火織は戸惑っていた。

ファミレスという食事を提供する所は知識としては知っていたが入店するのは初めてだった。

「そんなに、食べるものなのですか？」

ゆうに三人前の食事にデザート類が三品。

一方私は一品。

「頭使うと腹がへるんだよ」

あっという間に消費されていく。

男性とはこんなにも大食いなのだろうか。

いや、白井紅太が特別なのだ。

「つーか、神裂はそんな身体で少食だな」

「身体の大きさは関係ないでしょ？！」

私が一人前食べ終わる間に三人前を食べ終わる白井紅太もどうかしていると思う。

「いや、まさか本当にファミレスで飯食うのに付き合ってくれるとはね」

「貴方が誘ったのでしょうが！」

それに、肝心の要件を聞いていない。

「彼女を助ける方法とは？」

「それを俺の口から言って神裂は信じるのか？」

藁にもすがる思いで誘いに乗った。

これが罠であるならば、

「まあ、そんな怖い顔するなよ。それにこっちにもそれなりの都合がある」

睨む。彼女が救われるのなら私は――。

「言ったろ、頭を使うと腹が減る。魔術で言えばそれが俺の代償（ルール）なんだよ」

彼の話を信じるか信じないかは話しの内容を聞いて判断する。

その上で無駄であったならば、斬る。

「一つ、神裂の聞かされたインデックスの完全記憶能力は間違っている」
「え？」
驚く私を置いて、
「一つ、神裂達の所属する『必要悪の教会（ネセサリウス）』はインデックスに一年周期で記憶をリセットしなければいけない何らかの仕掛けを施している」
「な！」
さらに、
「一つ、完全記憶能力があろうと人間の脳は元々１４０年分の記憶が可能である」
それは、
「一つ、記憶をどれだけ溜めようと、脳が圧迫される事は脳医学上絶対にありえない」
告げられた。
「以上のことから『必要悪の教会（ネセサリウス）』は都合の良い様に下っ端である神裂達に真実を隠したまま、指令を出していると考えられる。つまり、神裂達は謀られていたんだよ」
ついでと言わんばかりに彼は言う。

「教会は元々何も問題なかったインデックスの頭に何か細工をしたと考えられる。そうすれば、インデックスの事を想う知り合いは教会の技術に頼るしか無くなる。そうやって、人の優しさと思いやりを使った悪魔のシステムだ」

最後に、

「多分、インデックスが魔術を使えないってのも嘘だろうな」

●

真実と後悔。
後悔と懺悔。
配点：（神裂火織）

●

第二十章　神裂火織と兄（後書き）

誤字修正

第二十一章　科学の兄と魔術師達（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第二十一章　科学の兄と魔術師達

●

『インデックスは魔術を使えないのは嘘である』
『インデックスは一年置きに記憶を消さなければ助からないのは嘘である』

２つの事実の前に恐らく、という前置きをしなければならない。
だが、神裂火織はそれが事実であると白井紅太の言葉を垣根なしで信用した。
何故ならファミレスを後にして人気のない道路脇で、

「もし信じられないなら、誓おう。この身を髪の毛一本から爪先の先まで神裂火織に捧げよう」
「本気、ですか？」
「間違っていたら好きにしろよ」

誓いを聞いた。
己の話を信じさせる為に対価として、命を差し出したのだ。
それは私達と同じくらいの覚悟。

「どうしてそこまで……」
「はぁ～。そりゃ、辛そうな顔したお前の顔だったり、年下の分際で俺より身長高いタバコ臭い野郎の辛気臭い顔だったり、シスターの強さだったり、色々理由を出せば限りないが。アイツの言葉を借りるなら、困っている奴を助けるのに理由なんているのかい？」

●

神裂火織と別れた後、上条当麻にも俺の推察を聞かせた。
「本当か！　じゃあ、今直ぐに――」
「アホか！　魔術師と共同作業だ！　後1日は待て」
神裂火織はステイル＝マグヌスと話をつけに、そして俺は、上条当麻とインデックスの説得役だ。
まあ、こちらの説得は直ぐに終わる。
問題は堅物の魔術師達の方だ。
インデックスへの説得は俺より説教野郎の上条当麻に任すとして、後俺ができることは、何も無いな！

●

「どうですか、ステイル」
「……。ふぅー。一理あるね。確かに僕らに『必要悪の教会（ネセサリウス）』が正しい情報を与えていないかもしれないね」
「では――」
ステイル＝マグヌスはタバコを吸いながら熟考する。
それは、神裂火織が相手の男に篭絡されている可能性はないかというものだ。
女みたいな男にうまく騙されてはいないか。アイツは頭が回る。
この時ステイル＝マグヌスは疑心暗鬼に陥っていた。
僅か数時間で神裂火織の思考を操れるものなのだろうか、と。
そして、白井紅太の持つ能力。身体操作（ボディーコントローラー）が他人の意思や思考まで操れるものだとしたら？　という疑惑が消えなかったのだ。
さらに悪いことに、超能力の力を魔術で解析することはできないの

だ。
それが、ステイル＝マグヌスに取って不気味なものであり、確かに白井紅太の意見は魅力的であった。
魅力的であるこそ、ステイル＝マグヌスはその裏に何かしらの陰謀があるのではないかと魔術師らしい考え方をしていたのだ。
何よりも、神裂火織の盛りのついたメスのような顔が気に食わなかった。
彼女が彼に好意を抱いているのなら篭絡されている可能性がかなり高くなる。
そうなると孤立無援で自分自身が立ち向かわなくてはならないのだ。
ステイル＝マグヌスは助かるかもしれないという曖昧な可能性よりも、とりあえず命を助ける事ができる方法を取ると決めているのだ。

「3日後、彼女の記憶を消す」
「な、ステイル！」
「僕はね、そんな曖昧な可能性よりも、とりあえず、彼女の命が助かる方法を取るよ。そうすれば彼女の命は助かるんだからね」

それでも、ステイル＝マグヌスは垂らされた希望を見捨てることが出来なかった。

「3日後だ。どの道時が満ちないと儀式は行えないからね。僕は3日後まで動かない」
「約束は明日の夜です。ステイル、あの部屋で私達は彼女を助け出します。来るか、来ないかは貴方次第です。それに、彼がインデックスに私達は敵では無いと説明してくれています。私達の望んでいた事が直ぐ目の前にあるのに貴方はどうして！」

タバコがまずい。

「僕の意見は変わらないよ。ま、女みたいな男の言い分では、『必要悪(セサリウス)の教会(ネ)』が怪しいらしいから、先にそちらに確認入れてみるさ。間違えだったら、彼。殺すんだろ」

そう言い残して立ち去る。

「全く、素直じゃないですね。貴方は」

聞こえないふりをした。

●

「そういう訳で、インデックスを襲っていた魔術師は貴方のお友達です」

「ハイそうですかって納得すると思うのかな？」

簡単にインデックスは納得しなかった。

上条当麻と白井紅太の二人がかりでも未だに信じようとしないのだ。

それはそうだろう。一年間も追われていた相手が実はお友達でした。

と言われて信じるお人好しではなかったのだ。

「だがなぁ。それが、『必要悪(ネセサリウス)の教会』の仕組んだ思惑なんだよ」

「でもでも、確証はなかったりする」

それを言われると弱い。ステイル辺りが確認を取ってくれていれば良いのだが。

「じゃあ一つ、お前は俺達を仲間だと思うか？」

「え？　仲間じゃないの？」

つまりは、

「なら、その仲間が信じるアイツら魔術師を信じてくれないか？」

「うーん」

これでダメなら厳しい。

「一回だけ！　今回の一回だけでいいから信じて！　ね、ちょっとだから。痛くしないよ？」

「紅太さーん！　なんかイヤラシいですよ！」

汚れ役を引き受けようではないか。

「インデックスさんの慈悲深い所を見てみたい！　ね、一回でいいから。怖くないから！　怖かったら電気消すから！」

「だから！　紅太さん！　後半全部だめだから！」

「うーん、紅太がそこまで言うなら一回だけ信じてみるかも」

「信じましたよ？！　このシスターは！」

●

魔術と科学の共同。

その先に待つものは何か。

配点：（インデックス）

第二十二章　魔術師の感情と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第二十二章　魔術師の感情と兄

●

神裂火織は号泣していた。
それこそ、白井紅太が引くくらいに。
上条当麻もまた、その光景を見てもらい泣きしそうであった。
インデックスは困った顔である。
神裂火織を泣かせたのはインデックスである。
手狭な小萌宅に四人。この部屋の主である小萌先生は学校で仕事らしい。
夏休みなのにご苦労様だ。
俺が神裂火織に連絡を入れた。この前のファミレスで携帯の連絡をゲットしておいたのだ。
何故かステイルはいなかったのだかそれはある意味良かったのかもしれない。
少なくともインデックスと同性である神裂火織に対してなら警戒を解きやすいはずである。
初めは警戒心丸出しのインデックスであったが、神裂火織の所持していた思い出の写真などを見て、

『覚えてなくてごめんなさい』

その謝罪で神裂火織は泣いた。
色々と思う所があるのだろう。
掛ける言葉も思いつかずこういった時の己の引き出しの少なさに俺は少し反省した。
幸い時間は余っている。
だから、存分に親睦を深めればいいと思う。

●

「インデックス、脱げ」
「ええ～！　いい雰囲気が台無しですよ?！　紅太さん！　イキナリ出した言葉がそれですか?！」

正直、インデックスと神裂のイチャイチャ具合に呆れていた。

『インデックスは魔術を使えないのは嘘である』
『インデックスは一年置きに記憶を消さなければ助からないのは嘘である』
これらを施している『必要悪の教会（ネセサリウス）』がインデックスの身体に何らかの仕掛けを刻み込んでいると踏んだのだ。
ならば身体の隅々までそれを確認しなければならない。

「大丈夫だ。この容姿の身体なら妹で見慣れているから」
「大問題です！　家族の裸と他人の裸は別物です！」

神裂までも上条と同じくツッコミを入れてきた。
インデックスを観察する。

「あ、あの、あんまりじっと見られると恥ずかしいんだよ?」

完全記憶能力、それを消さなければならない仕組みであるなら頭に近い場所に魔術が仕込まれているはず。
決して下半身などに刻むバカはいないだろう。

「上条、インデックスの手を右手で握ったことは?」
「ないけど?」

なら握れ。

「何？　何？　なんの意味があるのか説明して欲しいかも」
「インデックスに話した通り、教会の陰謀を暴こうという実験？」
「何で疑問形なんですか？！」

神裂、楽しそうだな。
何の反応もナシか。
いや、待てよ。
もし、何らかの仕掛けがあるとして、それが破られた時の対処があるはずだ。
魔術である以上、上条の右手で破れない魔術はないはずだ。
たとえ再生機能付きであろうとそれごと破壊できると思う。
なら再生が無理とすれば、破壊が待っているはずだ。
立場を変えて考える。
俺が教会側の人間だとしたら。
インデックスに刻んだ魔術に二重三重の罠を仕掛ける。
完全記憶能力の事がバレて真相に辿り着かれても大丈夫なように罠を仕掛ける。
インデックスを縛る魔術の仕掛けを解除しようとしたその相手と周辺を撲滅させるように仕組む。
だとしたらインデックスが魔術が使えないという神裂火織の言葉の真相は、この魔術の仕掛けに魔力を使用するように強制されていると考えるのが自然だ。

「よーし、上条。待て、お座り。一歩もそこから動くなよ？　インデックスに不用意に触るなよ？」
「俺は犬ですか？　インデックスに触れと言ったり触るなといったり大変そうですね！」

●

『そ、そんな。恥ずかしいんだよ……』
『恥ずかしがらずにもっと広げてごらん。ちょっと入れるだけだから』

扉の向こうから何やら如何わしい発言がステイル＝マグヌスの耳に聞こえた。

『痛くしないで欲しいかも』
『大丈夫。綺麗なサーモンピンクだよ。それに痛くしないって。きっとすぐ良くなるよ』

何を考えている！
彼女に手を出そうなど僕の眼が黒いうちは許さない！
部屋に踏み込むタイミングを見計らっていたのだが、聞こえてくる発言についに重い足が動いた。

●

「貴様ら！　何をしている！」

炎だ。
現象的には怒っているステイル＝マグヌスを四人の視線が捉えた。

「やっぱり来ましたか……」

神裂火織の呟きを聞き逃さなかったのは、白井紅太である。
さて、現状としてインデックスのお口あーんさせようとしていた所

にステイルが何故か怒り状態でいきなり部屋に入り込んできたわけだ。

「……」

そして絶句していた。

何がしたいのか理解不明なステイルに誰もかける言葉が見つからないようであった。

ならば、俺が協力者として補足してやらなければいけない気がする。

「遅刻だな。さて、役者も揃った所で物語（はなし）を進めようか」

●

ステイル＝マグヌスにコレまでの経緯を改めて説明をした。

予測と推測である白井紅太の考えの証明として、インデックスの身体のどこかに魔術の仕掛けがどこかに隠されているはずである。

なのでインデックスの身体を調べなければならない。

「それで？」

不機嫌を貼りつけた顔に、くわえタバコのステイルが続きを催促してきた。

せっかくインデックスとの仲を取り持ったのだが、苦虫を噛み潰したような顔で何かを耐えている様で一言二言言葉を交わして今に至る。

改めて、まるで仕事で実績のない新人の自信満々で作り上げた企画書を読み終えた後の上司のような態度で、

「それで、どうしたいんだ？」

今後を問うてきた。

●

泣く魔術師。
泣かない魔術師。
それは男女の違い。
配点：（我慢）

第二十三章　協力者達と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第二十三章　協力者達と兄

●

「それで、どうしたいんだ？」

なんとか搾り出した声に相手が、女みたいな男が答えた。

「お前達魔術師の言う、『とりあえず』確実にインデックスを助ける方法を取る前に、こちらの話を聞いてくれて助かったよ。それだけ、俺の話に魅力があったんだな。それとも……。まあいい。簡潔に述べよう」

いいか、と前置きをして、

「まず、神裂の話から教会がインデックスを飼い縛る為の『首輪』として、何らかの魔術が彼女の身体に仕組まれているはずであるという俺の予測の証明と、ソレを完全無効化した際に起こるであろう魔術の反撃――。まあ、インデックスに仕掛けられた魔術をぶち壊すからフォローよろしくって事だ」

「紅太さーん！　後半面倒になっただろ！　絶対に面倒になったよね！　はい！　面倒になった！」

面倒になったらしい。だが、ツンツン頭を見て思う。

魔術を打ち消す異常者。

鍵となるのはこいつか。

鍵のセキュリティの弱点を見つけたのが女みたいな男。

解除されたセキュリティに反応して出てくる警備を相手するのが僕らって事か。

ギャーギャーと騒いでいる男二人に期待しても良いのだろうか。

●

「インデックスの喉の奥に見つけた紋章（マーク）から俺の予測が正しいと証明されたわけだが……」

全員がインデックスの喉の奥を見るというシュールな光景は放っておいて。

「ココからが本番。つまり、上条当麻にもっとも負担がかかってくる。インデックスのリミットまで2日あるがコレを魔術で解除することは難しく、時間的猶予が圧倒的に足りない。簡単に言えば、上条さんよろしく頼みます」

「はいはい。上条さんは都合の良い男ですよー」

お人好しめ。

魔術師達は沈黙状態であり、こいつらを無視しても構わないだろう。もとより、魔術師達の協力が無くてもやるつもりだったし。

邪魔されない分ましだ。

「失礼しまーす」

軽い。

友人の家に遊びに来たような挨拶でインデックスの喉の奥に右手の指をを侵入させて。

バチン！　と。上条当麻が吹き飛ばされた。

●

余韻に浸る暇もなく、私は彼女の声を聞いた。

「――警告、第三章第二節。――禁書目録の『首輪』、第一から第三まで全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能。現状１０万３０００冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

概ね、白井紅太の予測が当たっていた事に戦慄を覚えながらも、事前にフォローを頼まれていた事と反撃が来ると聞いていたので、今後の展開に予測がつく。

「反撃が来るぞ！　魔術師達！　気を抜いている状態じゃねーぞ」

白井紅太の声だ。気を抜いていたわけではなく、彼女を救えるんだという余韻に少しくらい浸っていてもいいじゃない、と思ったのだが、その間に見事に先走りされた。

まあ、魔術を知らない彼等には仕方の無いことだと思う。

だが、一言、声をかけて欲しかった。

「――『書庫』内の１０万３０００冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術（ローカルウェポン）を組み上げます」

背筋が凍る。

どこまで推測と予測をしていたのだろうか。

操り人形の様に浮かび、眼球の中に血のように真っ赤な魔法陣の輝きがある。

彼女は魔術を行使している。

機械音声のように冷たい言葉が響く。
「――侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖（セント）ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

●

「――Ｆｏｒｔｉｓ９３１」
「――Ｓａｌｖａｒｅ０００」

インデックスの『眼球』と連動した魔方陣から光の柱の砲撃。
それを受け止める上条当麻はその物量に食い止めるだけで必死に見える。
光の柱は『竜王の殺息（ドラゴン・ブレス）』と言うそうだ。
光の柱についに上条当麻の右手が弾き飛ばされ、完全に無防備になった上条当麻を救うため、神裂火織が巧く働く、インデックスの足元。畳を切り裂いてインデックスが後ろへ倒れこんだのだ。
光の柱はアパートの壁から天井までを一気に引き裂いて夜空の雲までも引き裂いていた。
もしかしたら、大気圏外にある人工衛星までも引き裂いてるかもしれない。
破壊された壁や天井は木片すら残されなかった。
最悪な事に、木片の代わりと言わんばかりに純白の光の羽が何十枚と舞い散るのだ。
「それは、――伝説にある聖（セント）ジョージのドラゴンの一撃と同義です！　いかなる力があるとはいえ、人の身でまともに取り合おうと考えないで下さい！」

インデックスの視線が上条当麻に戻る僅かな間に神裂火織が叫んだ。

「ステイル！　上条の援護だ！」

「いちいち僕に命令するな！　――魔女狩りの王（インノケンティウス）！」

身構える上条当麻の前で炎が渦を巻く。

人のカタチを取る巨大な炎が光の柱から上条当麻を守る盾となる。

「行け！　上条」

上条当麻は白井紅太の声に一言も答えることはなくインデックスの元へ走り寄る。

走る。

「――警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を変更、戦場の検索を開始……完了。現状、最も難度の高い敵兵『上条当麻』の破壊を最優先します」

●

砲撃するシスター。

迎撃する協力者達。

活躍のない人物は誰か。

配点：（白井紅太）

第二十三章　協力者達と兄（後書き）

誤字修正

第二十四章　終焉と兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第二十四章　終焉と兄

●

光の羽が舞う。
インデックスが放った光の柱が壁や天井を破壊した後に生まれた何十枚もの光り輝く羽。
魔術を知らないが故、白井紅太はその脅威を感じ取っていた。
親友と、強くて愛らしいシスターが危ない。
だから、覚悟を決める。

●

神裂火織とステイル＝マグヌスは圧縮された時の中で確かに聞いた。
「ｏｎ　ｙｏｕｒ　ｍａｒｋ　ｇｅｔ　ｓｅｔ――、ＧＯ！」
二人の目にはその言葉を発した人物の影しか見え無かった。

●

ステイルの魔女狩りの王（インノケンティウス）は徐々に弱まっている。
上条の頭上では光の羽が舞っている。それを破壊するには上条の右手が必要だが、インデックスの魔術を破壊する方が優先だ。
それを理解しているのかしていないのか。
ひたすら突き進むアホ。
「――その幻想をぶち殺す！」

０．１秒以下の世界。
脳の加速処理に加えて、体内時間の加速。さらに、身体に伝達される指令を加速。
だから上条当麻とインデックスの居場所に追いつき二人を抱えられる。

「信じてたぜ。親友！」

加速された時の中で聞いた。
二人を抱え、小萌宅の窓をぶち抜いて飛び出し光の羽から逃れた。

●

この日、上条当麻は記憶をなくす事もなく、破壊された部屋の説教を受けた。
彼らの知らぬことであるが、人工衛星の一基が撃ちぬかれ破壊された。

●

病院だ。
流石の上条当麻も指の痛みに耐え切ることも出来ずに診断を受けたのだ。

「脱臼ねぇ。今度から掌底で対処しろ」
「それが親友の言葉ですか！　労いの言葉もなし？！」

軽食、というかパンやおにぎりにお菓子とついでに栄養剤やらドリンク類をコンビニ袋パンパンに詰めた相手。白井紅太に苦言した。

「君のがんばりに感動したー。よくやったー」
「棒読みでちっとも嬉しくない！」

昨日から食いっぱなしの紅太。
何でも能力で加速系を使用したらしい。
その加速系を多重に使用すると消費カロリーが異常らしい。
つまり、腹が減るらしい。
らしいが続くのはその辺りの説明を聞いた俺の頭では理解不能な用語を用いられて説明されたからである。

「看護師のねーちゃんも見れたし帰ろうぜ」
「……」

高校生らしい発言である。
俺の診断の為に病院に付いて行くと言った理由はコレか！
だが、あの光の羽に当たっていたら診断結果は異なっただろう。
下手したら死んだかもしれないと神裂お姉さんに怒られた。

「あ、言い忘れてたけど、助けてくれてサンキューな。光の羽って当たったらやばかったんだろ」
「べ、別にアンタの為に助けたわけじゃないんだからねっ！」

ツンデレかい！
まあ、それでもいいか。
何せ、夏休みは始まったばかりである。

●

「――と、まあ、上の判断は表向きは至急連れ戻す様にって感じだけど、実際には様子見というのが正しいかな。僕個人としては……。

いや、とにかく上は彼女の動向を観察するということだ」

ステイル＝マグヌスの話相手。白井紅太は上条当麻と別れた後、神裂火織からの呼び出しに応じたのだ。

「白井紅太ならどう思いますか？」

私は問う。

「魔術に相反する学園都市にインデックスがいるのが上の判断を様子見にさせたかもな。裏が読みづらいけど、そんな感じじゃない？　たぶん……」

たぶん、か。

その先に何か考えているようだが、敢えて聞かないでおこう。

あまり良くない答えを放って来そうだから。

「僕は君達と馴れ合うつもりはない。だからインデックスの魔力が回復するかも知れない可能性を考えて色々と情報を集める。その上で然るべき準備を整え次第、再びあの子を奪還するつもりだ」

心にも無いことを。それに良くスラスラと平然に嘘をつける。

本当はインデックスともっと色々と話しをしたいくせに。

こちらの視線にステイルが反応して、

「そうそう、君は神裂に命を捧げると契約を掲げたみたいだが、それは無事に達成された。今度は魔術師としてその対価に何か返さなければいけないんじゃないか？　命の対価に返すものって何だろうね？　神裂？」

特大の反撃を放った。

「別に気にすることはない。信頼を得るための方便だったわけだし……」

それでも、ステイルは言う。

「いいや。ダメだね。魔術師として借りはきっちりと返すものだ」

それはステイルもインデックスを助けられたから同等なはず！

「ま、奉仕でもしたらどうだい？」

「何を言ってるんですか！」

奉仕といっても、そういった意味の奉仕活動だろう。

「ありがたく受け取りたいが、俺達はもう仲間で友達だろ？　友達の間に貸し借りがあってもありがとうの一言で済む問題じゃねーの？」

白井紅太の言葉に私とステイルは息を呑む。

そして、一呼吸。

「ありがとう」

一つの言葉が交わされた。

●

科学と魔術が交わり物語を紡ぐ。

紡がれた物語は本来あるべき姿とは少しの違いを見せて終焉する。

配点：（とある魔術の禁書目録）

●

このＳＳには多大な原作のネタバレが含まれております。

今更注意を促してみたり。

エピローグ（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

エピローグ

●

上条当麻の部屋にインデックスは居候する形になった。
俺が遊びに行くと旨い飯が出てくると覚えたらしい。
まあ、それはどうでもいいことだ。
ところで、俺の妹、白井黒子は可愛い。
どうやら、幻想御手（レベルアッパー）事件解決で女が磨かれたように思える。

「良い女の顔になってきたね。黒ちゃん」
「良い男の顔になりましたわね。お兄様」

●

夏休みに入りてっきり毎日会いに来ると思っていた人物が2日ほどの空白期間を開けて私の元に会いに来たのだ。
それも、常盤台中学の寮に直接乗り込んできたのだ。
寮監には親族であるが男性ということで、客間に通されていたのだ。
だが、そこで兄は両親直筆の紙を提示した。
娘の学生生活が上手く行っているか報告されたし。
つまりは親の代行で兄が自分の娘の学生生活の様子を観察するための許可証だ。
お金を受け取る側の寮監はそれを許可しなければならない。
同時に夏休みで多くの生徒が実家に帰郷していることもあり、1時間という短い時間ではあるが、常盤台中学女子寮に男性の侵入を許したのである。
さながら授業参観だ。

「まさかこの常盤台中学に授業参観、というか、親族用の案内マニュアルが存在するなんて思いませんでしたの」

常盤台中学の入学費用や教育費がいったい幾ら掛かっているか知らない。

「まあ、ここよりもレベルの高い学校もあるし、常盤台中学から見れば優秀なレベル４の親族の依頼を無視するわけにもいかないよ」

兄が言う。

どこで知ったのか、それとも調べ上げたのか。

夏休み期間に常盤台中学に在学させている親が子供の学生生活を視察できるシステムの存在があったらしい。

兄は首から許可証明書をぶら下げており、これがある限り常盤台中学学内、寮を視察できる。

どうか、お姉様に出会いませんように。

●

「あれ？　紅太さん？　どうして常盤台中学の寮に？」

御坂美琴の問に白井紅太は答える。

「ん？　黒ちゃんの学生生活の視察」

そう言って許可証明書を見せてくれた。

なるほど。

私はその行動力に驚く。

本当に妹思いだなぁ。

「お兄様、もう時間ですの」
「ああ、そうだね」
どうやら制限時間があるらしい。
「美琴、下着はちゃんと片付けような……」
「なっ！　見たの？！」
同室の黒子。
許可証明書。
つまり、部屋にまで入ることは容易に想像できた。
「見た、ではなく。視界に入った。まあ、可愛らしいプリントを付けた下着だが、そろそろ年齢的に卒業したほうがいいと思うがね」
「――」
顔に熱が灯る。
恥だ。
電撃を浴びせようとしたが、
「視察は終わりましたね？　それではこちらの書類に記入をお願いします」
寮監が現れたので不発に終わってしまった。
●
顔つきが変わった様に思えたのに結局はいつも通り。
「全くお兄様は阿呆ですわね。その無駄な検索能力と頭脳をもっと

意義のあることに使えませんの？」
「黒ちゃんと言う意義のあることに使ってるよ」
真顔で答えられても困る。
日陰になっている公園のベンチで会話する。
お姉様も呆れ顔ですわね。
「家族思いなのはいいんじゃない？　まあ、紅太さんみたいに度が過ぎると鬱陶しいけど」
お兄様に対してどこか容赦が無くなって来ている気がしますの。
「考慮しよう。短パンを穿いて、その下にプリント付きの下着をつけている美琴の貴重な意見を心に留めておこう」
「ぐっ！」
お姉様に対して全く容赦がないですわね。
それは置いておいて、疑問をぶつける。
「所でお兄様、何か私に用があったのでは？」
視察後に公園まで引き連れてきたのだから何かしらの用件があることは明白だ。
「幻想御手（レベルアッパー）事件の話を聞こうかなって、少しは俺、役に立った？」
●
「木山春生が犯人ねぇ。脳のネットワークを通して多才能力（マルチスキル）を使ったか。見かけによらず無茶苦茶な事する奴だね。美琴は大いに活躍

したようで」
「べ、別に私は……」
大したことはしていない。
だが、それを言う前に、
「お姉様ったら色々と活躍しましたわ。傷まで付けて」
黒子によって防がれた。
そのついでとばかりに抱きつかれたので電気ショックを与えてやった。
日常だと思う。普通の学生生活かどうかは知らないが夏休みは始まったばかりだ。
唐突に声が聞こえた。
「白井紅太。そこで何をしているのですか？」
ベンチ横の階建を降りてくる人影。
背は高く、髪は長く、巨乳で、格好がおかしい美人だった。
そして、その美人がこちらに近づいて来て紅太さんの前に立つ。
「神裂じゃん。何してるのってこっちのセリフじゃね？」
「いや、私は、その、例の事をどうすべきかと考えながら散策していたのです」
知り合い？
「お知り合いですか？　お兄様？」
●

似ている。
白井紅太の妹だ。
見れば分かる顔ですね。
偶然出会った白井紅太と妹。それに……誰だ？

「神裂は俺の友達だ。んで、こっちが妹の黒子で、そっちが妹の友達の御坂美琴ね」
「そうですか……」

友達と言う響きに僅かに嬉しさがこみ上げる。
妹がいると聞いていたが確かに可愛らしい。
その友達の御坂美琴という女の子も可愛い。
嫉妬ではない。
こみ上げる若干の怒り。
例の事とは対価の支払方法。
そして、

「私は白井紅太の物です。以後お見知りおきを」

口が滑ったとしか言い用がないほどに流暢に言葉が出た。

「なんですってぇー！」

この日、この時。
一人を除いて、白井紅太の驚いた顔を始めて見たのであった。

●

妹と御坂美琴

妹と神裂火織
妹と白井紅太

配点：（驚愕）

●

そんな訳で2クール分で収まりました。
最後までこのＳＳを読んでくださった方々に感謝します。

外伝エピソード０１　夏休みと兄（前書き）

この小説はとある魔術の禁書目録の二次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

外伝エピソード01　夏休みと兄

●

神裂火織の爆弾発言から己の人生で最も頭を使って穏便に事を済ませた白井紅太は何とか生きていた。
こと、恋愛や男女仲について、些か歳相応の経験しか無かった。
つまりは、恋愛未経験であった。
過去、白井紅太は告白をしたことがなかった。
数人から告白を受けたことはあったが、どうも、妹以外の女性に関心が持てず丁重に慎重を重ねて断りを入れていたのだ。
概ね彼に告白をした女性達は友人として付き合いがある程度であり、時たまデートをしたり、食事に出かけたりと、それ以上の関係と進展は無かった。

神裂火織はそれらを全て飛ばして、イキナリのモノ宣言であった。

●

嘘を嘘として突き通すためには真実の中に一つだけ嘘を交える事が相手を騙しきる為に必要な事である。
よって、白井紅太が妹と御坂美琴を騙す為に取った嘘は、知り合いの神裂火織がジョークとしてその言葉を放ったという苦しいものであった。
神裂火織という人物の素性を隠し通し、加えて神裂火織が放った言葉の経緯も隠さなければいけない事がどれだけ大変であるか。
それは白井紅太にしか分からないことである。
妹である白井黒子は兄の狼狽、と言っても長年兄妹である白井黒子にしか分からない程度であるのだが、その兄の狼狽を見抜いていた。

それは、ただ兄が重要な嘘を付いているという疑心。
それを隠す真意は、恐らく、知られたくない何かがあるという確信。
それでも、妹として知らねばならない。

「将来的に義姉になるかもしれない女(ひと)ですの」

おおよそ白井紅太の考えうる最悪の思考を白井黒子は持っていた。

●

御坂美琴に取って、白井紅太はどうのような人物であるか。
御坂美琴自身、良くわかっていなかった。
そう、あの神裂火織が爆弾発言をするまでは。
自分の恋慕に気付いたのは、否。気付かされたのは神裂火織の発言であったと御坂美琴は感じた。

「全く……。余計な事に気付かされちゃったわ……」

御坂美琴の人生に今後大きな影響が出るであろう、初恋に気付いた瞬間であった。

●

神裂火織に要らぬ知恵を入れたのは、土御門元春であった。
神裂火織がどうやって白井紅太にお礼を返すのかと悩んでいた所に現れたのが土御門元春であった。
同学年のクラスメイトの言葉に神裂火織は多少の抵抗があったのだが、それでも、その身を差し出して代価を返す以外に白井紅太を満足させる方法が思いつかなかったのだ。

「礼の一言で済まされるような代価ではありませんよ……」

それは、インデックスに関わる様々な問題を解決したのと、再度、彼女と友として歩める環境を施して貰った恩である。

神裂火織とインデックスとの連絡方法はもっぱら携帯電話であった。その携帯電話を購入したのは白井紅太である。さらに名義は白井紅太だ。携帯電話を連絡用として何の見返りも無くプレゼントしたのだ。

「友達記念、というのは建前で、何かあったら連絡する為に必要な物だ。何せ、上条当麻という巻き込まれ体質がいるからな」

理由はどうあれ、神裂火織とインデックスの間に連絡方法を作ったのは白井紅太であった。

●

「まあ、昨日のアレはアレでアレしたもんだからアレなんだよ」

「お兄様、全然理解できませんわ」

白井紅太は妹である白井黒子に再度弁解をしていた。

自分でも言い逃れできたとは思えない上に、長年付き添ってきた妹には感づかれているであろうと思ったのだ。

かくして、兄妹二人きりで買い物という都合を付けてその間にできるだけ誤解を解こうとしたのだ。

「神裂は友達であって、彼女ではない。それに、多少誤解はあったかもしれないが、神裂を助けた恩があって、それを返そうとちょっと夏の暑さで頭がやられた発言が昨日のアレだったわけです」

「へぇ。またお兄様は随分と盛大に人助けをしたみたいですのね。

女性が身を捧げる程困り果てた方に手を差し伸べたと？」
棘のある言い方だと白井紅太は感じたのだが、それでも概ね間違ってはいない気がしていた。
いっその事全てを話してしまいたかったのだが、それでは妹が巻き込まれてしまうと白井紅太の頭脳が警告を促していた。
それ故、妹に対して秘密を作らなければいけないという苦痛の選択を強いられていた。

「黒ちゃん。男にはね。覚悟を決めて成すべきことを成す時があるんだよ……」
「えぇ、そうでしょう。でも意味がわかりませんですの。かと言って、ここ数日のお兄様の顔が逞しくなったのも事実ですの……。まあ、隠すならばもっとうまくしてくださいね」

兄妹だから。
兄妹である故。
互いに通じるものがある。
兄は隠し事を伝えられない。それを妹は察して、敢えて聞かず。
妹は兄を想い兄は妹を想う。

「次はどこに行こうか？」
「食事ですわね。ちょうどお昼前ですし」

だから、謝罪も、感謝もしない。
だから、今まで通りに接する。
それが、白井紅太と白井黒子の兄妹の在り方であった。

●

誰が誰の一番か。
想人は何処にいるのだろうか。
配点：（恋心）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3935z/

とある白井黒子の兄

2012年1月6日09時46分発行